
IN BLOOM 番外編集

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IN BLOOM 番外編集

【Nコード】

N8151T

【作者名】

羽鳥 紘

【あらすじ】

連載作・IN BLOOM（聖少女と黒の英雄）（n6749q）の番外編集です。

その1（前書き）

ヴァルグランド編・第十六話～十七話間のお話です。十六話までの
ネタバレ含みます。咲良視点、緩いラブコメ傾向。

その1

俺がこのヴァルグランド軍の砦に滞在するようになって、幾日か経つ。

エドワードは、噂はすぐに消えると言っていた。確かに人の噂も七十五日と言う。だが残念ながら、まだ七十五日も経ってない。七十五日は結構長い。消えるまで俺はどこにいればいいのかというと、居場所はなくて。

なんだかんだ、俺はずっとエドワードの部屋にいる羽目になっている。いや、もちろん嫌というわけではない。ないのだが。

「咲良、いつまでそんな所で夜明かしするつもりだ？ 奥を使っていると言っているのに」

今夜も部屋の隅で毛布を抱えてうずくまる俺を見下ろし、エドワードが呆れたような声を落とす。けど呆れてしまうのは俺の方だ。彼女はよく、こんな得体の知れない男と同じ部屋で眠る気になるよ。警戒心が薄いのは強さを伴っているからだろうけど、これじゃ気を遣ってる自分が馬鹿みたいである。

「エドワードこそ、いつまでソファで寝る気だよ？ 俺はここにいるんだよ」

エドワードは俺が頑固だと言いたいんだろうが、俺に言わせれば頑固なのは彼女の方だ。そもそもここは彼女の部屋なんだから、その持ち主であるエドワードがベッドを空けなければならぬ理由などどこにもないのである。ましてや、彼女は女で、俺は男だ。……いくら見た目が逆であろうとも。

「女の子ソファで寝かせて、俺がベッド使えるわけじゃないじゃないか！」

そんな俺の主張に、エドワードは片手を腰に当て、少し複雑な顔をした。

「私はもう随分前に女を捨てた。今更そんな気を遣って貰わなくて

結構だ」

「そんなこと言われても、俺の気が済まないの」

「年下なんだから、素直に甘えたらいいのに」

まるで駄々っ子を相手にしているかのように、はあ、とエドワードが疲れたため息を吐く。ひとつしか違わないのに、そんなあからさまな年下扱いは心外なのだが、それを怒れるような立場にもない行き場所のない苛立ちと共に俺は立ち上がると、エドワードの手を掴んで奥の部屋へと引っ張った。

「咲良？」

「いいから、エドワードは、ちゃんとベッドで寝てくれよ！」

そして、無理やり彼女を奥の部屋へと押し込み扉を閉めようとしたのだが、今度はエドワードが俺の手を掴んでそれを止めた。

「……今宵は冷える」

そんなことは、俺だって一緒に気温を体感してるわけだし解ってる。毛布を被っても肌が冷気を感じるほどだから、寒さに強いとか弱いとかの問題じゃなく今夜は寒かった。だからこそエドワードも俺に声をかけたんだろうが、俺が引けない理由だって同じだ。

「……だから、ソファで寝るのはやめろって」

こうなると意地の張り合いである。しばし俺たちは睨みあっていたけれど。

先に目を逸らしたのは、エドワードの方だった。勝った、と俺はよくわからない勝利の余韻に浸っていたのだが、それには少し早計だった。

「わかった。それなら、一緒にベッドで寝よう」

とんでもないエドワードの一言に、俺の思考とか動きとか、色んなものが停止する。そんな俺の手を軽く引いて、彼女はこちらへと視線を戻し。

「そうしたらきっと温かい」

顔を近づけて、俺の鼻先に囁きかける。

「え……ええええ！？ えつとあああの、ええええ、うえ、あ、おお

おおッ!!」

何を言おうとしても意味のない呻きにしかならず、完全に余裕を失った俺は必死でエドワードの手をふりほどくと、無我夢中で扉を閉めた。それだけの行為が百メートル全力疾走よりも疲れて、ずるずると座り込んでぜーはーと荒い呼吸を繰り返す。だがようやくそれがおさまると、扉の向こうでエドワードがくすくすと笑う声が聞こえてくる。

……遊ばれた。そこでやっと気付く。

「エドワード……」

「言うことを聞かないからだ」

うずくまりながら、恨みがましい俺の声は扉の向こうの彼女にも届いたらしい。してやったりという声が、扉を通して返ってきた。

「……風邪を引くなよ、咲良」

笑い声はしばらく続いていたけれど、やがてそれは穏やかで優しい声へと変わる。そんな声を出されちゃ怒れもしない。結局、苛立ちもしてやられた悔しさも、それで全部溶けてしまうんだから彼女には勝てない。おやすみと呟いて、俺は毛布を手繰り寄せる。

……今日は隅っこの指定席ではなく、ここで眠ろう。

その2

今日は朝からやけに暑い。と思っていたのに、さっきから妙に寒い。そのくせ汗が出て、頭がぼーっとして、体の節々が痛い。

これは、もしかしくなくても。

「咲良、朝から気になっていたんだが、もしかして——」

俺が気付いた辺りで、エドワードも気付いたんだろう。だが、彼女が手を伸ばすのに気付き、俺は咄嗟にそれを避けてしまった。

「……」

「……」

まるで弟さんのように、エドワードが眉間に皺を寄せるのを見て身構える。そして軌道を変えて向かってくる彼女の手はさっきより早くてよけ切れず、思わず掴んで止めると、逆に掴み返され捻り上げられた。

「私に挑もうなど百年早い」

そういう言葉は、彼女が言うとはひどく様になる。ああ、勝てるなんて思ってます。ただでさえ勝てないのに、こんなへるへるじゃ抵抗ひとつ試みることにすらできない。だが諦めて大人しくなった俺の額にひやりとした感触があると、その直後に自由は返ってきた。だがもう今更取り繕う意味もなく、そうすると意地を張ることすら困難になって、俺はその場に崩れ落ちた。

「酷い熱じゃないか。何故黙っていた」

「……さっきまで、平気だったんだ」

ぜーぜーと息が切れる。それすら堪えられなくなりつつも言った言葉はほぼ嘘だった。

だって、それがばれてしまえば、彼女はきつと。

「言わんことない。だからあれほどベッドを使えと言ったのに」

言うと思ったよ。だからどうにかやり過ごそうと思ったんだが、それにはさすがに熱が上がりすぎた。朝の時点では、大人しくして

ればなんとかなると思っただけだな。しかしこの分じゃ、今夜からは俺の言い分は通らなそうだ。それでも一応は抵抗してみる。

「でも、そしたらエドワードが風邪を引いていたかもしれないじゃないか」

「生憎だが、そんなヤワな鍛え方はしていない」

……さいですか。なんとも遅しい。

俺だって別に病弱じゃないけど、年に一回くらいは熱を出す。そしてそのたび、馬鹿でも風邪引くのねーと姉ちゃんに野次られる。確かに俺は馬鹿だけど、だったら風邪を引かない特典くらい欲しくて、これでも体を鍛えてるつもりだ。でもやっぱ彼女のそれとはレベルが違うんだろうとは思っけど。

抵抗する術を失くした俺は、黙って彼女の肩とベッドを借りる以外の道も一緒に失くした。それ以降は、術があっても実行できないくらいに衰弱してしまった。食事も受け付けられないし、声を出そうと思えば咳が出る。こんなに酷いのは、さすがに小さい頃以来か。とにかく寒くて気持ち悪い。

でも悪化するのも無理はない話だ。

元の世界なら、調子が悪ければ医者に行き、注射の一本でもして薬を飲んで、あったかくして寝てればそうそう何事もない。

けどここに病院はない。医者がいるのかどうかは知らないが、いたところで、魔女疑惑のかかった俺を果たして真摯に診てくれるかどうか。薬は、熱さましの効果があるっていうものは貰ったけれど、効果の程は謎だ。今のところ効いてはいない。そして、何より寒い。エドワードの分の毛布まで使ってるのに全く温かくない。当然だけど、ここにはエアコンもストーブもない。

家なら、その両方ある。母さんが消化にいいもの作ってくれて、野次りながらも姉ちゃんが水とか持ってきてくれたりする。

そんな環境に改めて感謝したことなんてなかったけど、俺は随分恵まれた場所で暮らしてたんだな。こんなときになってそれを思い知った。

夜も更けて、寒さはますます厳しさを増す。

——ここは寒い。

帰りたい、な。

温かい家を、朦朧とする意識に思い描いたそんなとき。

実際に体が温かくなった気がした。

幻想で温かくなるなんて、いよいよ俺はやばいのか——、そう思いつつも温もりは心地よく、ようやく深い眠りに落ちることができた。

夢ひとつ見ない、真っ暗で深い眠りのあと。

気がついたら、すでに明るかった。朝になったせいか、それとも熱が引いたのか。あんなに辛かった寒さはもうなくて、ベッドの中でほっと安堵の息を吐く。ピークは過ぎたみたいだ。

そうすると、多分昨日はソファで寝たのであろう、エドワードのことが気になった。昨夜は人を氣遣う余裕もなかったけど、今日はもう大丈夫だ。慌てて彼女を探そうとして——そこで俺は凍りついた。

「……な、ななななっ、」

なんで、と。誰に聞いているのかなんの意味があるのかわからない言葉を繰り返し。そんな俺の声で、群青の瞳がうつすら開いた。俺の、ほんのすぐ、真横で。

温かくなったのは、幻想でも気の所為でもなかったらしい。けどその温もりの正体を知って、引いたと思った熱が昨日以上の勢いで上昇していく。

ほんの僅かエドワードが動き、それだけで額に彼女のそれが重なる——元々そんな至近距離だったのに、これで距離はゼロになる。

「良かった。引いたな」

間近で微笑みかけられて、だけど俺はそんな彼女を思い切り跳ね

のけて起き上がる。随分な態度だと自分でも思ったけれど、取り繕うような余裕はなかった。

「無理をして起きるな。まだ少し熱い」

なのにそんな俺の態度にもかかわらず、エドワードの声は笑いを噛み殺していた。だからきつとバレている。

その熱は、風邪のせいじゃないってこと。

「……水」

無愛想な俺の声に、エドワードは返事をしてベッドを降りると、くすくす笑いながら部屋を出ていった。扉の閉まる音に、ようやく俺は息を吐き出す。呼吸すら忘れてた。

ここには何もない——なんてことは、なくて。

ベッドにはまだ温もりがある。それはきつと、エアコンよりストーブより温かい。

医者も薬も、栄養のあるご飯がなくても、この世界も悪くないなんて思うあたり、俺はとっても現金だ。すっかり軽くなった体を動かしながら苦笑を零す。

戻ってきたら、礼を言わないといけないな。

そんなことを思う俺の耳にはもう、小走りにこちらに近づいてくる足音が聞こえていた。

その3

この世界——というか、この国に四季があるのかどうかは知らないけれど。日本の冬くらいには、ヴァルグランドは寒かった。

「ここって、寒いよね……。いつもこうなの？」

俺の何気ない問いに、エドワードがこちらを向く。

「まあ、近頃は少し冷え込むが。大体いつもこんなものだ」

そうなのか……。夏が好きな俺としては、それは遺憾だ。寒いのはあんまり好きじゃない。そんな俺にとってみたら、エアコンもストーブも、こたつさえもないこの世界はやっぱり厳しい。防寒具が毛布一枚というのはなんとも心許ない。

「寒いのか？」

「少しね。ストーブとかあったら嬉しいんだけど」

「すとーぶ？」

「うん、ないよね、わかってた」

妙なイントネーションで返してくるエドワードに——この世界にないものを口にする、彼女は大概そうやって反芻してくる——、俺は少々肩を落とした。ストーブは無理でも暖炉くらいないものか。だが、この部屋に火を焚くような設備がないのは見ればわかることである。まあここは娯楽施設でも民家でもないし、命に関わるとか凌げないほど寒いわけじゃないからそれも仕方ないだろう。充実した暖房設備に囲まれた、現代っ子の俺がひ弱なだけで。そんな俺の考えを肯定するように、エドワードが口を開く。

「この皆は大きい方だが、所詮は攻防用の皆だからな……。確かに過ごしやすくないほどじゃないし」

「いいよ、我慢できないほどじゃないし」

エドワードが済まなそうな顔をするので、俺は慌てて両手を振った。それは解っていたし、エドワードに謝られるようなことじゃない。大体、彼女が平然としているのに、俺が寒いとか言ってちゃ駄

目だ。我慢の子になる決意をしていると、ふとエドワードの目つきが変わった。

「なんなら、今晚も一緒に寝るか？」

「いや、いいです！」

そんな申し出に、俺は振っていた手の勢いをさらに強めて悲鳴のように叫ぶ。からかわれてるのは解ってるけど、俺も単純なのでいちいち動揺してしまう。案の定くすくすと笑われて、俺は熱くなった顔を隠すように背けた。このところ、エドワードは俺をからかって遊ぶのを楽しんでいる気がする。たったひとつ年上なだけで、ずいぶんと俺を年下扱いしてくるし。

「いや済まん。可愛いからついつい」

「……それ、フォローになつてると思ってる？」

「そう怒るな。寒いなら暖を取る方法はあるぞ」

俺が怒っても彼女は全く困ってはくれない。むしろ益々楽しそうに笑うのである。すっかり玩具にされていることにむくれていると、彼女はそんなことを言って立ちあがった。そして、部屋の隅から瓶を一本手に取って戻ってくる。まさか、それって……

「呑めば温まる」

「いやいや。俺未成年だし」

やっぱり酒か。だがそんな俺の声に、エドワードは首を傾げた。

「確か咲良は、十六と言っていたいなかったか？」

「う、うん……」

「ヴァルグランドでは十五で成人だ。それに、酒で暖を取るのに歳は関係ないだろう」

そんなものか……。そりゃ日本の常識で話しても仕方ないけど。でも酒はなあ……。一度父ちゃんに呑まされたことあるけど、一口でくらくらしで倒れるかと思った。おまけに次の日死ぬほど気持ち悪くて学校も行けなかったし。以来、さすがに父ちゃんも俺に呑ますことはなくなった。

「でもやっぱり酒はやめとくよ……。俺、弱いんだ」

「だが、寒いのだろうか？」

断る俺にお構いなく、エドワードはグラスに酒をついで、自分でその中身をあおる。一気に干してしまっても、彼女は顔色ひとつ変えず平然としていた。

「そう強い酒ではない。いくら弱くとも一杯くらいでは酔わぬだろう」

「う……」

「それとも、やはり一緒に寝るか？」

「いただきます」

何かうまくこと手玉に取られている気がするんだけど。そう言われて俺は思わず彼女からグラスを受け取ってしまった。量はさつき彼女が飲んだ量の半分程度だったけれども、匂いだけで頭が痺れる。本当に軽いのかと一抹の疑問が頭を過ぎったが、目の前で一気飲みした彼女が平然としているのだ。ここで吞まなきゃ男が廃る……というわけで、俺は覚悟を決めるとグラスの中の液体を一気に胃に流し込んだ。間髪入れず、焼けるような熱さが俺の喉と胃を襲う。こ、これ絶対軽いじゃない！

「な、大したことないだろう。温かくなったか？」

笑うエドワードの姿がぐにやりと歪む。……なんで彼女は何ともないんだ。

何一つとして彼女に勝てないことが無償に悔しくなってきた、俺は力が抜けそうになる足を踏ん張った。汗が滲むほど体が熱くて、上着を脱ぎ捨てながら、エドワードの方に歩き出す。

「さく——」

何か言いかけた——多分、俺を呼ぼうとした彼女の声が途中で途切れたのは、俺が突然掴みかかったからだろう。ついでに、小打ち刈りの要領で足をかけると、余程呆気にと取られていたのか、あっさりとは彼女はバランスを崩して、俺の狙い通り後ろにあったソファに背中から倒れる。

「……まださむいから、」

すかさず被さるように押さえつけると、俺はうまくろれつが回らない口を動かし、大ウソをついた。

「あつためて」

途端、酒を一気にあおってもまるで変わらなかったエドワードの顔が、耳まで真っ赤になる。

——勝った。今度こそ勝った。

心地よい勝利の余韻に浸った瞬間、俺の意識は暗転した。

■ □ ■ □ ■

ふと目覚が覚めたら、ものすごく頭が痛かった。

酷い頭痛と吐き気に襲われながら、何があつたのか必死に思い出す。それでエドワードに勧められるまま、酒を一気飲みしたことを思い出した。どうやらこれは、昔父ちゃんに吞まされたときと同じ——二日酔いというやつらしい。

しかしそこまでは思い出せても、どうにも吞み干した後のことを思い出せないのである。

いくら考えてもどう頑張ってもまるで思い出せないのも、エドワードに聞いたなら無視された。…… たったあれだけの量の酒で倒れたりして、さすがに呆れられたのだろうか……。

しかし不思議なことに、エドワードが俺をからかって遊ぶことは、この日を境に激減したのであった。

その4

ここしばらく、エドワードがろくに話をしてくれないので、俺はなんとなく気まずい日々を過ごしていた。

丁度、俺が酒を飲まれて、ぶっ倒れた日からだ。

愛想を尽かされたのかとも思ったのだが、過保護なのは相変わらずで、部屋を空けることはあまりない。だけど、一緒にいる分だけ、このどこか気まずい空気に俺は耐えきれなくなってきた。

間がもたなくて続けていた素振りが本日千回を数えたあたりで、刀を下ろして汗を拭う。

「……あのさ、エドワード」

意を決して、窓辺で本を読んでいたエドワードに声をかける。：

「いや、多分読んではないんだけど。視線はずっと窓の外に向いていたし。と思って、素振りしながらずっと彼女を見ていた自分に気付いて、何か恥ずかしくなる。だが、その視線が外から俺に向くのを見て、俺は慌てて言葉を継いだ。

「あー、あの。何か怒らせたならゴメン」

とにかく、あの日からエドワードの様子が変わったことには間違いない。恐らく俺が原因なのだろうから謝ったのだが、彼女は怪訝そうな顔をしただけだった。

「何故、そんなことを？」

「だ、だって。怒ってるだろ？ 最近あんまり口きいてくれないから……」

おずおずとそう言うと、エドワードは小さく息を吐いて、読んでもいない本を閉じた。

「別に、怒ってはいない」

「ならいいんだけどさ……」

だけど、やっぱりそれきり会話は途絶えてしまふ。いや、前だって四六時中話していたわけではないから、気にする俺がおかしいの

かもしれないけれど。それでもやっぱり気まずいと感じてしまって、俺は無意識のうちに話題を探していた。

「そついえば、いつも何読んでるの？」

俺が素振りをしている間、エドワードは本を読んでいることが多い。ふと気になって聞いてみると、エドワードはそのとき初めて本の存在を思い出したように、膝の上に目を落とした。

「……ああ。別に何ってほどもない。ただの大衆本だ」

「そうなんだ。てっきり戦術書とかかと思った」

「期待に添えなくて悪いな。これは今本国の貴族の間で流行っている恋愛小説」

それは意外。意表を突かれた俺が目丸くしていると、エドワードはふつと声を立てて笑った。

「似合わぬか？」

「あ、いや。そんなことは」

「戦術書の方がお似合いだと顔に書いてあるぞ」

「……そんなことないってば」

弱々しい俺の反論に、またエドワードは笑った。似合わないとは思わないけど、意外だったのは本当だから何も言い返せない。でも、とにかくエドワードが笑ってくれたので、それには少しほっとしていた。

「……面白いの？」

聞いてみると、エドワードは笑いをおさめて、少し困ったような顔をした。ああ、そついえば読んでなかったっけ……。

「まあ、興味はあったから読んでみようと思ったが、今一つ頭に入らぬ」

「あ、そつ……」

「……咲良はきっと、もといた世界に可愛い恋人の一人もいるのであろうな」

突然のエドワードのそんな言葉に、は、と俺は間の抜けた声を上げてしまった。

「な、何だよ急に。いないよ、そんなん」

だから失恋したばかりなんだって、言わなかったつけ俺。それも告って即フラれたから、恋人なんていたこともない。即答した俺を、今度はエドワードが意外そうな目で見る。

「そうなのか？ 咲良、可愛いのに」

ちよつと待て、何かおかしくないか？

「……男に可愛いっての褒め言葉じゃないって、知ってる？」

「ああ。あ、いや済まん。悪気はない」

申し訳なさそうに頬を掻くエドワードを見て、俺はため息をついた。まあ悪気ないってことは、それがエドワードの率直な感想なんだろう。ちなみに、俺が好きだった先輩の率直な感想もそんなところだろう。可愛いってことはイコール、男としては見ていないってことだろうから。

女の子が男に求めることって普通、かつこよさとか遅しさだろうし。

「……エドワードは？」

「ん？」

「恋人いるの？」

あまり俺にとって嬉しくない会話をはぐらかそうと、とつさに話題を変えたけど。すぐに返ってくると思っていた返事はなかなか無かった。またエドワードが困ったような表情をして、胸に何かおかしな疼きが走る。

「えーと。俺、この世界に来た日に振られたんだよね」

その瞬間、何故か俺ははぐらかしたかった話題に戻していた。いや、戻したかったわけじゃないんだけど。それ以上に、さっきの話を続けたくなかった。エドワードは自分のことを聞かれるといつも辛そうだったし、それに、その答えを聞いて俺はどうしたいんだって話だ。

……知らなくていいし、知りたくない。どうしてか、そう思ってしまう。

「……どんな人？」

ふと、エドワードが小さく呟く。よく聞き取れなくて首を傾げていると、すぐに彼女ははつきりした声で聞き直してきた。

「君の想い人は、どんな人だったんだ？」

問われて、ちょっと前までの日々に思いを馳せる。

……学校での日常生活が、もう随分昔のことのように感じた。

「どんな人って言われても……、うーん、年上で、気が強くて、なんていうか……」

学校とか部活って言ってもエドワードはわからないだろうから、説明しづらい。

先輩は、中学校のときの部活の先輩だった。

剣道部の、女子の主将で、大会で何度も優勝してて、まあ俺より余裕で強かった。パワフルで、明るくて、でも優しくて美人で、はつきり言ってモテた。所謂高嶺の花というやつで、手が届くなんて思ったことはないんだけど。

でも先輩は俺を可愛がってくれて……文字通り可愛い可愛いとか可愛がってくれた。髪を伸ばした方が可愛いとか、セーラー服の方が似合うとか……、要するに遊ばれていた。俺はそんな先輩を追いかけて同じ高校に行ったものの、剣道は苦手でやめてしまった。苦手意識の理由は、いつまでも先輩に勝てないから。勝てない限り男扱いなんかして貰えなそうだけど、勝てる自信なんか全くなくて放り出してしまったんだ。そんなヘタレな俺だから、想いが届くわけがない。

ああ、なんかこうして思い返せば返すほど……

「……エドワードに似てるよ、少し」

ぼつりと、そんな言葉を零してしまう。

エドワードは少し驚いたような顔をした後に、複雑そうに目を逸らした。それから、また俺へと視線を戻す。

「……それなら、まだ振られたと思うのは早計かもな」

「え？」

「とりあえず振っておいて様子をみようという腹かもしれんぞ」

「……エドワード、そんなことすんの？」

「さあ、私は女を棄てた身ゆえ、色恋沙汰など無縁だからな。だが、似てるというから私ならどうするか考えてみた」

面白そうに笑う彼女を見て、改めて女って怖え、などと思う。こっちは必死だっというのに。

でもそれより、色恋沙汰は無縁って聞いてなんかほっとした。いや、なんでほっとしてるんだ俺？ 答えの出ない自問をして唸っている間に、エドワードが椅子から腰を上げる。

「咲良が想いを遂げる為にも、早く元の世界に戻れるといいな」

穏やかに微笑みながら、エドワードがすぐ傍まできて俺の頭を撫でる。……こういうことをされると、どう考えても身長が負けているという事実を突きつけられて、セツナイ。

「いいよ、もう……。どっちかって言えば、好きってより憧れだったし。周りが悪乗りして無理やり告らされただけで、それがなかったら言うつもりなかったし。所詮そんなくらいのことだから」

「……そうか」

エドワードは励まそうとしてくれてるんだろうけど、なんか喜べない。自分でも理由のわからない苛立ちと共に吐き出すと、エドワードは髪を撫でる手を止めた。

「ならば、そんな見る目のない女のことなど、さっさと忘れろ」

「……！？」

ふわりと体を包んだ温かさに、俺は呼吸を忘れて息を飲んだ。

「君は強くて優しい。それを解ってくれる、もっと相応しい人がいずれ現れるさ。……だから、いつか元の世界に戻っても変わらずにいてくれ」

優しく俺を抱く彼女の腕の中で、聞こえてきた言葉は少し苦いものだった。

俺の一体どこが強いというのか。俺よりずっと強い彼女に言われると、皮肉にしか聞こえない。だけど、その声も、この腕も、温か

くて優しいから、何も言えない。熱くなる頭で必死に平静を保ちながら、照れを隠すように俺は言葉を探した。

「……えっと。エドワードって、なんかお母さんみたいだね」

間違っても俺の母はこんなに優しくはないが、過保護なところとか、こつやつて力づけてくれるところとかが、なんかザ・おかあさんという感じがする。そう思って呟くと、何故かぴしりと空気が凍った。

そんな状況に抱く既視感。

これは、姉ちゃんの気に入りの服を汚しちゃったときとか、部屋にあった先輩の菓子をそれと知らず食っちゃったときとか、エドワードの前で老け顔って言ってしまったときとかの——あの空気。……あ、いやその「

取り繕おうとするものの、何が彼女を怒らせたのかがわからない。

……どちらにしる時すでに遅しというやつで。

結局それから数日間、エドワードは口を聞いてくれなかった。

その4（後書き）

読んで下さりありがとうございました。今のところ日常編はここまですが、そのうち気まぐれに追加するかもしれません。以降は別のシリーズになります。

その5

「……何の真似だ？」

刺々しい声を頭上に聞きながら、俺は床に頭をこすりつけんばかりに土下座をしていた。

「だから、お前を見込んで頼みがあるんだ、ライオネル」

顔を上げると、険しい表情が俺を見下ろしていた。けどその険しさには、戸惑いも少し混じっている。

まあ戸惑うのも無理はないだろう。俺も異世界で土下座が通用するとは思っていない。それでも、いけすかない相手に思わず土下座でお願いしちゃうくらい、俺は切羽詰まっていたのであった。

何故、と問われれば、それは――

「ライ！ 咲良を見なかった――」

戸惑うライオネルに事情を説明しようとした矢先、突然部屋の扉が開く。ノックもせず飛び込んできたのは、まさに今俺を切羽詰まらせている当人だった。そちらを向いた俺と目があうや否や、彼女は言葉半ばで口を閉ざす。そして、多分俺を探していたんだろうにも関わらず、唐突に回れ右をして退室していった。

扉の閉まる音に隠れてため息を吐きだした俺を見て、ライオネルがさっきより幾分納得いったように俺を見る。

「頼みとは、姉さんの機嫌を直せとかそういうことか？」

見透かされた問いに、俺は首を縦にふりまくった。

「もう何日も口をきいてくれないんだよ。いい加減きまずい」

「そんなもの自分で謝れよ。僕が姉さんをどうこうできるわけないだろ」

「謝って済むなら俺だってお前を頼らないよ！ お前にどうこうできないもの、俺はもつとどうしようもないじゃんか！」

そっけなく踵を返そうとするライオネルの襟首をつかみ、俺は力任せにがくがくと揺すった。

「や、やめろ！ 僕は機嫌の悪い姉さんに近づきたくない！！」

悲鳴のように叫ぶライオネルの声を聞き、俺は彼を揺する手を止めた。その顔色が青ざめているのは、多分激しく揺さぶられたからというわけではないだろう――、彼の言は俺にも理解できることであり、俺だって逆の立場だったら絶対関わりたくない。

「謝ったのに機嫌が直らないなら、誠意が足りないんだろう」

襟元を直しながら、ライオネルにも見放され、俺はいよいよ追い詰められた。

まだこれが俺がいた世界で、姉ちゃんとか先輩なら、ケーキでも買って頭を下ればなんとかならなくもないのだが……、物で釣るなどか言っなかれ、俺なりの誠意だ。だが、この砦にケーキ屋さんとかはきつとないだろうなあ。そもそも、エドワードに何をあげれば喜ぶのなんて見当もつかない。

「……なあ、ライオネル。エドワードって、何が好きな」

「もしかして物で釣ろうとか考えてるのか？」

うう、いちいち痛い突っ込みをしてくる奴だ。気まずくて俺は目を逸らした。まあ、それを聞けたところで、俺にあげられるものなんてないんだけどさ……。諦めて、許してもらえるまで謝るしかないな。そう思いなおしてライオネルに目を戻すと、彼もまた違うところを見ていた。

「ライオネル？」

「……花」

どこか遠くを見るような彼の目がなんだか寂しげに見えて、名前を呼ぶ。すると彼は俺を見てそう呟いた後、今度は下に視線を落とした。

「え？」

「花が好きだったよ。……白い花。裏の森でも探せば咲いてるんじゃないか」

こちらを見ないまま呟いた彼は、俺の問いに答えてくれたんだということにやっと気付く。

花、か。それなら、確かに探せばなんとかなりそうだ。とても良いことを教えて貰って、俺は目を輝かせつつライオネルの両手を掴ってぶんぶん振った。

「!？」

「サンキュー、ライオネル！」

驚いたように目を白黒させるライオネルに感謝の言葉を述べ、俺は彼の部屋を飛び出した。

■ □ ■

その後俺はその足で森に入って、花を探していた。だがすぐに見つかると思ったのはさすがに樂觀しすぎていたらしく、木と草ばかりで花らしきものは見当たらない。それもそのはずだろう——外は寒い。花なんか咲くような気候じゃない気がする。

あまり部屋を空けたら、エドワードはきつとまた心配するだろう。ここ数日、口は聞いてくれないけど、それでもエドワードは俺の傍にいてくれるし、さっきだって俺を探してくれていたんだと思う。彼女は少し過保護すぎると思うけど、でも心配はかけたくない。

急ぎ足で俺は草の間や木の根元にも目を凝らす。……それにしても。

「花、かあ……」

なんだか意外だった。

姉ちゃんや先輩とかでさえ、花より団子な人達だった。花なんて贈ったって、「こんな食べられないもの貰っても」って言われるのが関の山だと思う。けどあのエドワードが花が好きだなんて。

いや、似合わないっていうわけじゃないけど。

彼女を知る度に、不思議に思う。俺を可愛がってくれたり、恋愛小説に興味があったり、花が好きだったり。知れば知る程、彼女は英雄って呼ばれるような人物には見えなくなってくる。勿論、彼女が強いのは知っているんだけど——

「……あ」

ふと木々の切れ目が見えて、俺はそんな声を漏らした。少し遠くに川のせせらぎが聞こえる。そこまで歩いていくと崖があって、覗きこむと下は川だった。だけど俺の興味を引いたのは崖でも川でもなく。

その崖の途中に咲く、白い花だった。

「あつた！」

ようやく探しものを見つけて、盛大に独り言を叫ぶ。

だが見つけたはいいものの、手を伸ばしても届きそうにない。けど、目も眩むような高さというわけじゃないし、下は川だ。見た感じ、流れもそう急じゃない。足場もありそうだし、フレンシアの砦を抜け出したことを思えば、あれと大差ない難易度だ。

よし、と気合を入れ直して、慎重に崖を下る。そして、目的の花に手を伸ばしたその瞬間だった——蹄の音が聞こえてきたのは。

もしかして、と思う間もなく、聞き慣れた声が俺の名前を呼ぶ。

「——エドワード？」

咄嗟に答えると、蹄の音は止んで。それからすぐに、崖の上から顔を出したエドワードが、群青の瞳で俺を見下ろす。そして、

「何をしているんだ！」

「ゴッ、ごめんなさい——！」

くわつと凄い形相で睨まれて怒鳴りつけられたので、俺は反射的に頭を抱えて謝った。途端、ぐらりと体が大きく傾ぐ。馬鹿、と叫ぶエドワードの声を遠くで聞きながら、俺は谷底の川に吸い込まれたのであった。

「咲良——！」

一瞬気が遠くなりかけたけど、激しい衝撃と水しぶき、そして名を呼ぶ声に目を開ける。

起き上がろうとしたらあちこちに鈍い痛みが走ったけど、それで

も腕も足もちやんと動いた。川はそれほどの深さもなく流れも穏やかで、俺は川の中に座ったまま、あつという間に崖をおりてこちらに駆けよってくるエドワードに目を向けた。

「咲良、怪我は!？」

濡れるのも構わず俺の傍に膝をついて、エドワードが勢い込んで尋ねてくる。そんな彼女を見て、大丈夫、と答える前に何故か笑ってしまった。だけど怪訝そうな目を向けられて、慌ててそれを引っ込める。心配してくれたのが嬉しかったなんて、恥ずかしくてとても言えない。

「ごめん。大丈夫だよ」

「本当に？」

疑わしげな顔で聞いてくる彼女に、俺は自分の手に視線を落とし、自分の体より先に咄嗟に庇っていた白い花は、どうにか無事だった。いやこれ一本だったわけじゃなくて、崖にはまだ他にも咲いているわけで、ちゃんと自分の体を守っていれば打ち身も減ったかもしれないんだけど。でも無意識にそうしてしまったんだ。

だけど、また心配かけてしまつて、こんなところまで探しに来させてしまつて、花一本だなんて、余計に墓穴を掘った気がする。

心配そうな彼女にそれを差し出しながらも、情けないやら恥ずかしいやらでとても目は合わせられなかった。

「ええと、その……ごめん。怒らせたり、心配かけたりばかりで目を逸らしているので、彼女がどんな顔をしているのかはわからない。だけどなかなか返つてこない返事に恐る恐る顔を上げると、彼女はぽかんとした顔で花を見つめていた。

「……エドワード？」

呼ぶと、彼女はそこで初めて気がついたかのように俺に問いかけてきた。

「私、に？」

それに頷くのは、俺にとってはあまりにも当然のことだったんだけど。エドワードは驚いたように目を見開き、何度も双眸を瞬かせ

る。

「……出ていったのでは、ないのか」

「え？ あ……」

ふと彼女が漏らした言葉に、彼女が心配してたのは俺の安否だけではないことを知ることになった。

もしかしたら、いつも俺を一人にしないのも、少しの用でも、慌てて帰ってくるのも――

「私に愛想を尽かして出て行っただのか、それとも元いたところに戻ってしまったのかと思った」

「な、なんで――」

とても彼女を直視できなくなつて、その長い髪が川の流れに攫われて揺れているのをぼんやり眺めながら、だけど聞こえてきた言葉はおかしなもので。

愛想を尽かされたのは俺の方だと思っていたのに。

「俺、怒らせてばかりなのに」

うまく言葉にならなくて、だけどそう呻くと、ふと花を持つ手に体温を感じた。

「……私は、怒ったり笑ったり、そんなことずっと忘れていたんだ。黒太子と呼ばれるようになってから、ずっと」

そつと俺の手から花を取り、そして、エドワードは顔を上げて笑った。

――その笑顔があんまり眩しくて、あんまり白い花が似合うから。思わず目を細めてしまった。

彼女はいつも黒い軍服を着ていて、凛々しい風貌にそれがとてもよく似合っているんだけど。こんな風に笑っているのを見ると、黒い軍服より白いドレスの方が似合うんじゃないかって、思う。

黒太子と呼ばれる、戦場で剣を振るう彼女を、俺は見たことがない。

だから、俺は彼女が英雄に見えないなんて思うんだけど。だけど、普通に笑って怒って、普通の女の子のように見える彼女の一面は、

もしかしたら俺しか見てない一面なのかもしれない。

「……もう、黙っていなくなってくれ。怒ったりしないから」
そんなことを思った瞬間、聞こえてきた声に顔が熱くなった。

大事そうに花を抱きながら、呟いた声は力無くて、笑った顔はなんだか儚くて。……守ってあげたいと、思ってしまうくらい。そんな自分の思いに戸惑いながらも、俺はほぼ反射的に叫んだ。

「い、いいよ。俺、無神経だし、嫌なときは怒ってくれないとわかんないから！……だけど、俺他に行くところないから、その……」
けど、何か気恥かしくて、言葉は尻すぼみになる。言いたかった言葉は、結局川の音に消されそうなくらい小さくなった。

「……帰ってもいい？」

だけどちゃんとそれは届いたようで、泣き笑いのような顔をしたエドワードが、立ちあがって俺に手を差し伸べてくる。

……本当は、それは俺がやらなくちゃいけなかったことであり。
守りたいなんて、彼女に言わせれば百年早いのかもしれないと苦笑しつつ、俺はその手を取って、だけどなるべく頼らないように立ち上がった。

ちなみにその帰り道、エドワードが跨る馬の後ろで振り落とされないよう必死で彼女にしがみつく羽目になった俺は、やっぱり百年以上早かったと痛感していたのであった。

その6

エドワードの部屋は、基本的に人が訪れることはあまりない。来たとしても弟さんくらいで、軍に関する事だとか、戦況だとかを伝えたり相談にくる程度だ。……たまに、俺を襲ってくることもあるけれど。

それ以外に他の兵士が来ることは今のところなかったので、ノックの後に彼ではない声で彼ではない名を名乗り上げるのを聞いて、けど驚いたのは俺だけではなかったようだ。いや、ライオネルはノックなんかしないから、その時点で違うことはわかるのだけど。それを聞いたエドワードも、少し怪訝な顔をしていた。

「何だ」

「ライオネル様が——、その」

来訪した兵士の口からライオネルの名前が出て、またエドワードの表情が変わった。口を開きかけて、だけど俺にちらりと視線を投げてからそれをやめると、エドワードは席を立て扉の方へと歩いて行った。多分、入れといいかけて、俺に配慮してやめたんだろう。やや気まずくて小さくなりながら、部屋の扉を開けるエドワードの背を見守る。……弟さんに何かあったんだろうか。エドワードもきつと同様のことを思ったんだろう、少し心配そうだった。俺は弟さんと仲がいいわけじゃない——っていうかむしろすごい悪いから、彼が心配というよりは、そんなエドワードのことが心配になった。ライオネルには悪いけど。

「ライがどうかしたのか」

扉を開けて問うエドワードの向こうで、兵士が敬礼の後で答えたのは。

「——お倒れになりました」

などと言うから、さすがにエドワードじゃなく俺までも焦ったの

だが。

「ただの風邪って。ほんとに貧弱だな、お前」

「う、煩い……！」

俺の揶揄に、反論する声は弱々しい。

本当のところ、俺もこないだ熱出したばかりだから人のことは言えないのだが。この弟さんにはいつも手を焼かされているから、ここぞとばかりに仕返ししておく。さすがに酷い病気だったらやめておくけど、言い返してくる元気はあるようだからこれくらい良いだろう。エドワードも心配そうな顔はそのままだが、さっきよりはどこかほっとしたような感がある。

「疲れが出たんだろう。後のことは私がやるから、ゆっくり休め」

「だが……」

「元々私がすべきことだ。気に病むことはないさ」

ぜいぜいと息を切らせる弟さんから彼女の方に目を向けると、彼と話をしていたエドワードも丁度同じようなタイミングでこちらを向いた。

「済まない、咲良。ライが動けない以上、私が軍を統率せねばならん。今までのように君の傍にいてやれない」

「え？ ああ……大丈夫だよ、俺は」

そんな風に言われると情けない。だが実際、敵だらけのこの皆で一人になるのは少し怖いと思っているので、そんな風に言われなくても情けないには変わらないけれど。でもなけなしのプライドでそんな不安を隠して答えると、エドワードは少し微笑んで俺の髪を撫でた。

「なるべく早く戻る」

しかしいくらなんでも、これじゃ初めてお留守番する子供じゃないか。恥ずかしさに何も言えないでいると、突き刺さるような視線を感じた。

「姉さんに……触るな……！」

うん、熱で視覚までやられてるんだろうか。どう見ても触られて

いるのであって、俺は一切触っていないんだが。それとも、俺の髪が彼女の手を触っていると不満でも言いたいのだろうか。その捉え方は一般的ではないと思うが。

納得行かない目で叫ぶライオネルを見ると、名残惜しそうに頭から手が離れ、では、とエドワードは声を上げた。

「行ってくる。私がない間ライを診てやってくれ、咲良」

しかしとんでもない要求が来て、俺とライオネルの悲鳴が重なった。

「はあ！？」

綺麗に声がハモった後に、互いに険しい顔を見合わせた後、同時にエドワードへと向き直る。

「ま、待ってくれ姉さん。なんで僕がこいつに——」

俺が言葉にならない不満に口をぱくぱくさせている間にライオネルがそう叫び、それに便乗してぶんぶんと首を縦に振る。だがエドワードはきょとんとしてこちらを見ただけだった。

「なんだ、私じゃないと駄目か？ 寂しいのか？ ライ」

「いつ、いやっ、そうじゃない！！」

「そうか。てつきりお前も添い寝して欲しいのかと思ったぞ」

「そんな訳——」

不服そうな割に顔が真っ赤なのは、熱のせいではなければこいつのシスコン度は相当危険レベルだ。だがそんなことを冷静に考えている場合ではないことに、エドワードの言葉の一部分だけを反芻したライオネルの声で思い知る。

「——『も』？」

「わあああ！ わかった！ 後は任せろ！ 行つてらっしゃい！！」

ライオネルにいらぬ詮索をされる前に、俺は咄嗟に叫んでいた。あんなことバレたら、今度こそライオネルに殺される。エドワードはそんな俺の声に押されるように踵を返したが、その瞬間、本当に一瞬だけ——彼女がくすつと笑ったのを俺は見逃さなかった。……わざとだな。

ばたんと部屋の扉が閉まり、俺は修羅場の空気なまま、ライオネルと二人残される。

「……貴様、まさか姉さんにいかがわしいことを」

「し・て・な・い！　んなこと考えるお前がいかがわしいわ！」

「ふざけたことを、毎日姉さんの部屋に入り浸っておいて——」

だが激しい咳が、彼の言葉を遮る。

「言わんこっちゃない。大人しく寝とけよ」

「貴様の世話にはならん！」

「俺だつてやだよ。でもエドワードに頼まれたし……」

それに、成り行きとはいえ「任せろ」と答えてしまった以上、放り出してエドワードの部屋に戻っているわけにもいかないだろう。それじゃ嘘をついたことになってしまいうし、気まずい。とはいえ、子供でもあるまいし、似たような歳の男の看病なんて積極的にする気になれない。とにかく腰をおろそうと椅子を探して周囲を見回すと、手をつけてない食事が目に入った。

「お前、飯食つてないの？」

「いらん」

「食わなきゃ治らないぞ。あ、薬もあるじゃないか」

「受け付けん」

「子供みたいなこと言うなよ。それとも愛しの姉さんに食わせて貰わなきゃ無理か？」

「——貴様、ふざけたことを！」

だから何故そこで赤くなるんだ、危ない奴だな。だが俺の挑発は功を奏したようで、ライオネルは起き上がると食事に一瞥をくれた。……こんな面倒な奴の看病なんて、エドワードの頼みじゃなきゃさすがに気のいい俺でもお断りだ。

開始三分程度で疲れてしまつて、俺は長いため息を吐いた。

「エドワード、いつ戻ってくるんだろ」

「……訓練と軍議、それから雑務も色々ある。最近は僕だけで追い付かないこともあったからな……戻ってこれればいいが」

俺の独り言に、ライオネルは意外にも答を返し、それから食事
手を伸ばした。そして、かなりのスローペースではあるが、少し
づつ口に運び始める。

「倒れている場合じゃない。姉さんに負担をかけては、僕が意
味がない」

まるで自分に言い聞かせるように、ライオネルがぼつりと呟く。
それからだいたい時間はかかったが、驚いたことに彼は食事を全て食
べきると、大人しく薬も飲んだ。よほど姉が心配なんだろう。

「訓練とか……、軍のことをエドワードがやるのって、なんか想像
できないな……」

この分では俺がすることはとくになさそうだ。

言ってるそばから訓練でも始まったのか、外から声が聞こえてく
る。それを聞いているだけの俺にとっては、ただの気だるい昼下が
りだけれども——この指揮を執っているのはエドワードなのだろう
かと思うと、どうしてか落ち着かなかった。

「……この軍の指揮官はエドワードだ。前は姉さんが全てやってい
た」

「うん、知ってるし、エドワードが強いのだって見てればわかるよ。
それでも……何か、似合わないというか……」

不思議そうなライオネルに、そんな風に返す。

似合わないっていうのもおかしい話で、彼女がヴァルグランドの
英雄って聞いたときは、何の違和感もなかった。女の子っていうこ
とを知らなかったからかもしれないけれど、凜とした表情も風貌も、
そう呼ばれるに相応しいと思っていたのに。

なんでそう思うのか自分でも分からないから、ライオネルが怪訝
な顔をするのも無理はないと思う。

「信じられないなら、見てくればいい」

「——いや、いい。……なんか、見たくない。やっぱり、似合わない
と思う」

花を持って微笑んでいたエドワードが頭に過ぎった。あの笑顔な

ら、見ていたいと思うんだけど。

「……なら、黙れ。僕は寝る。早く復帰しなければ」
言うなり、ライオネルが毛布を被って目を閉じる。

「だが、そうしたら姉さんがお前のところに帰るっていうのが、釈然とせんが」

刺々しい声を残して寝息が聞こえ、俺は苦笑した。

ほんと、とんでもないシスコンだと思っていただけ。今は、なんとなくライオネルのその気持ちかわかる気がした。

その7

扉の向こうで物音がして、まどろみから引き上げられる。

物音といつても些細なもので、いつもの俺なら絶対にその程度では起きない筈だ。なのにどうしようもなく覚醒してしまった理由に気付いて気恥かしくなりながらも、扉が開くのを見てほっとした。ほっとしている自分に気付けば、また恥ずかしくなるのだけでも夜明けはまだのようで、黒髪と黒軍服は扉の向こうの暗闇に溶け込んでいる。だけど、部屋の窓から差し込む月明かりが、群青の瞳を照らしていた。

「……おかえり」

何を言っているかわからず、咄嗟にそんな言葉が出てくる。

ライオネルが倒れてから二日、エドワードは俺の前に姿を見せなかった。二日目に入って復活したライオネルが軍務に戻ったので俺も部屋に戻ったけれど、それから彼女はなかなか戻ってこなかったのだ。

「ただいま、咲良」

嬉しそうにそう言って笑うと、エドワードは隅っこでうずくまる俺のところにもっすぐ近づき、俺の前でしゃがんだ。

「待っていてくれたのか？」

「……いや、寝てたよ、ちよっと」

「ああ、起こしてしまったのか……、済まない。どうせいなかったのだから、寝室を使えば良いのに」

いないからといって、女の子のベッドを勝手に使えるほど俺は図太くない。けどそんなことを語っても仕方ないので、それより俺は話を変えた。

「忙しかったんだろ？ エドワードこそ、早く休んだ方が」

「ああ……、だがもう少ししたらまた出る。ライが無理していないか様子を見たいし」

確かにあいつはやせ我慢していそうだ。無理に食事をかきこんで、薬を飲んでいた様子を見るに、とにかく動ければ飛び出していきかねない気配を感じた。だから、申し訳なさそうなエドワードに向かって声を上げる。

「……だつたら余計少しでも休んだ方がいいだろ。俺なんかより自分や弟のこと心配しろよ」

乱暴な言い方になってしまったのは、恥ずかしかったからなんだけど。気を悪くしなかったかと心配になるが、目が合った彼女はそれどころかくすくすと笑っていた。

「……何？」

「いや、なんでも……、あ」

笑われてむっとうしていると、エドワードは笑うのをやめた。でも俺がむっとうしたからやめたのではなく、何かが気になったという感じで、エドワードは立ちあがると窓辺へと歩いていった。そちらを見て、彼女が何を気にしたのかが俺にもわかる。

「少し、しおれてしまったな」

窓辺の一輪ざしには、この前俺が贈ったあの白い花が挿されている。花が好きらしいエドワードは、それをとて大切にしてくれていたのだけれど、いくら世話をしたって切り花だからそう長くは持たない。そんなことは当然エドワードにだって分かっているんだろうけど。

「……そりゃ、いつかは枯れるよ」

「ああ、わかつている」

窓辺で月明かりを受けるエドワードはとても悲しそうで、何故か心臓をぎゅっとなつかまれるような息苦しさを感じた。そんな思いに突き動かされるように、反射的に立ちあがった俺を、悲しそうな顔のままエドワードが見る。

「枯れたら、また取ってくるよ」

「外は危険だと言っているだろう。……いいんだ。それに——、これがいいんだ」

子供のようなことを言って、エドワードが曖昧に笑う。どういう意味なのかはかりかねて、何て言っているのか分からなくなったけれど。代わりに、ふと思いついたことがあった。

「なら、押し花にする？」

「押し花？」

俺の提案をエドワードが反芻する。その様子じゃ知らなそうだな。「花を保存する方法だよ」

「そんなものがあるのか？」

心底驚いたように目を丸くするエドワードに頷いてみせると、彼女は興味津津といった感じでまた俺の傍まで戻ってきた。

「教えてくれ」

「う、うん。じゃあえっと、とりあえず……何かいらぬ紙、ある？」

俺の問いに、エドワードはぐるっと部屋を見渡すと、やがてふと一点に目を留め、椅子の上に放り出してあった本を持って戻ってきた。

「って、それって本じゃん。汚れるから、読めなくなるよ」

「いい。もう読まん」

「でも……」

本は大事にと幼稚園で習った俺には抵抗がある。しぶってみせると、エドワードはちよっと考えるように本を見てからそれを置き、今度は机の方に向かって、上に置いてある書類から数枚抜いて戻ってきた。

「それ、重要書類とかじゃないの？」

「本国からのライオネルの召還命令だ」

「……いいの、それ」

「本人が受け取らないものを私が持つていても仕様がなかるう」

苦笑しながらそう言われて、俺も苦笑しながらそれを受け取った。確かにあの超絶スコンヤローは、拘束して引きずってでも行かない限り、姉から離れることはなさそうだ。

受け取った紙を持って一輪ざしがおいてある窓辺に行き、花を取り出して長すぎる茎を折る。そして紙の上で綺麗に花弁と葉を広げると、紙を折ってそれを挟む。それから、そんな俺の一連の作業をじつと眺めていたエドワードに、俺は重しになるようなものがないか尋ねた。少し考えたエドワードが持ってきたのは結局さっきの本で、今度は俺も黙ってそれを受け取って花の上に乗せる。

「こうすれば花の水分が抜けて腐らないよ。まあ、適当だから綺麗にできるかはわからないけど。普通は朶とかにするんだ」

「適当という割には、随分手慣れていたな」

それは姉ちゃんが前に夏休みの宿題でやってたのを散々手伝わされたからである。

まあそんなことはどうでもいいので曖昧に笑っていると、エドワードはわくわくした子供のような目で重し代わりの本を——いや正確にはその下の花をだるうが、見つめた。

「……本、面白くなかったの？」

なんとなく聞いてみると、エドワードはこちらを見ないまま、答もなかなかくれなかった。その横顔は少し困っているように見えて、質問を撤回しようか悩み始めた頃によくエドワードが口を開く。「恋、とはどういうものなのか、私には解らん」

だが内容は唐突なものだった。聞く限り答には聞こえなかったそのの意味を考えて、ふとその本を恋愛小説と言っていたことを思い出す。

「どういうものって……、今まで誰か好きになったことないのか？」率直に問うと、エドワードは少し考えるような素振りを見せてから、やはり首を横に振った。

「……わからん。私は戦ばかりしているから、人の感情に麻痺しているのだろう」

「なんだよ、それ」

エドワードが馬鹿なことを言いだすので、俺はつい声を荒げた。だけど、彼女がそんな自虐的なことを言うのは珍しい。というより、

今まで自分のことなんて全然言わなかったから。自分のことを話してくれるのは嫌ではないけど、でも自分のことをそんな風に言うのは、よくないと思う。

そんな俺の感情を読みとったように、エドワードは薄く笑った。

「好意を持っているつもりは相手からそう言われてな。だが何も言い返せなかった。だが話に聞いたり本で読んだりするような恋焦がれるという感情は、そんな淡泊なものではない気がするんだ」

そんな彼女の言葉に、苛立ちはますます募った。……なんだそれ。そんなの、相手の方がおかしいじゃないか。

「どう考えても相手が馬鹿だろ。それこそ忘れるよ、そんな奴のこと」

前に励まして貰った言葉と同じようなことを、今度は俺がエドワードに向けていた。どんなつもりだろうと、そんな相手を傷つけるような言葉はいはい言うやつろくでもないような感じしかない。

俺だって、エドワードをよく知ってるわけじゃない。それでも、これだけは言える。

「感情が麻痺してるような人が、笑ったり、花を大事にしたりなんかしない」

エドワードは一度ふっと笑みを消したが、またすぐに笑顔に戻った。

「咲良……、ありがとう」

さつきよりもずっと柔らかい笑顔で礼を言われ、照れて顔を背けようとしたのだが、頬に掛かった手がそれを阻む。誰の手かなんて考えるまでもなく、俺の前にはエドワードしかいないわけで。

「……え？」

「ならば、君が忘れさせてくれ」

戸惑う俺を覗きこんで、間近でエドワードがそんなことを囁いて。

「——ッ!？」

動揺した俺は、咄嗟に離れようとのけぞってバランスを崩し、そのまま後ろに倒れて壁で後頭部を強かに打った拳句、立てかけてあ

った剣を派手に薙ぎ倒しながらその中に突っ込むことになった。

「咲良!？」

そんな大惨事を見てエドワードが俺の名を叫び、頭を抱える俺の傍に膝をつく。

「済まない、冗談だ。そんなに派手に転ぶとは思わなくて——」

だがその言葉は最初こそ済まなそうだったが、後半どんどん震えていく。そしてとうとう、堪え切れなくなったのだろう。最後におもいきり彼女は吹き出した。

「ふっ、あははははは!」

エドワードは俺をからかってくすくす笑ったり、穏やかに笑ったりすることはよくあるけれど、こんな風に思い切り声を出して笑うところは初めてみた。最初はばかんとして、でも俺が笑われていることに気付いてちよっとむっとして、だけどそんなものはすぐに消えて。

笑うなよ、って文句を言いながら、最終的にも俺も声を上げて笑っていた。

俺は女顔な上単純馬鹿で、エドワードにからかわれてばかりだけど。それで彼女が楽しんでもくれるのなら——笑ってくれるのなら。

女顔で単純馬鹿で良かったなんて思うあたり、俺は本当に単純馬鹿である。

第一話 白い花と黒い服（前書き）

エドワード過去編。話は本編よりもシリアス・暗めです。全年齢の範囲内だと思われませんが、もしかしたら際どい表現があるかもしれないので、一切受け付けないという方はご注意下さい。三人称です。

第一話 白い花と黒い服

「良かった、綺麗に咲いて」

空になるまで水差しを傾けて、独り言を呟く。水滴が煌く白い花弁を映しこみ、少女は嬉しそうに群青の瞳を細めた。そして大きく息をつく。

今日はよく晴れている。

屋外で体を動かしていると暑いほどで、額には汗が滲んでいた。黒い前髪がべたりとはりついて気持ちが悪い。水差しを置いて手で乱暴に顔の汗をこすり、それからふと気がついて両手を見る。

土いじりをしていたので、両手には泥がついていた。

「……やっちゃった」

近くに鏡はないが、今自分の顔がどうなっているかは容易に想像できる。小さく息をついて、少女は水差しを拾うと歩き出した。

「エレオノーラ様！」

だが呼びとめられて、少女は足を止めた。気がつかない振りをするようかとも考えたが、ここまで大きな声で名前を呼ばれて気がつかない人もいないだろう。仕方なく振り向くと、見知った顔の女官が、まあと眉を顰めた。想像していた通りの展開ではあるが。

「なんという顔を」

「言わないで。今洗おうとしていたの」

「一体何をなさっていたのですか」

聞くまでもないだろうに。女官の声に咎めるような色がある時点で、何をしていたかなど分かっているに違いない。だが一応、少女——エレオノーラは持っていた水差しをさらに目に留まるように持ちあげて見せた。

「花の世話」

「そのようなこと、エレオノーラ様がなさらなくても。ああ、お召し物も汚れて」

「あら本当。また怒られてしまうわ。だからドレスって面倒なのよ」
片手でスカートをつまんで嘆くエレオノーラの手から、女官が水差しを取り上げる。

「……母上が大事にしていた花だから、私が世話をしたいの」

取り返そうとした手が女官が身を引いたことで空を掻き、エレオノーラがむっと眉根を寄せる。

「とにかくお召変えを」

「……わかったわ。でも少し摘んでいきたいから待って」

「エレオノーラ様」

「兄上にお見せするの。もう汚さないから」

止めようと立ち足はだかる女官をひらりとかわし、エレオノーラは軽やかに走りだした。

■ □ ■

エレオノーラが花を持って兄の部屋を訪れることができたのは、たつぷり一刻が過ぎてからだ。着替えと小言の間に花がしおれるかと本気で危惧したが、どうにかそれは免れることができた。

「見て、エドワード兄上。綺麗に咲いたでしょう」

「……朝と服が違うな、エル」

だが兄から返ってきたのは花の感想ではなかった。

「朝は白かった」

目を細めて花弁に触れながら、その言葉が花ではなく服を示していることに、気付くのが少し遅れる。

「また汚してしまったのだろう？」

「……ご明察恐れ入ります」

「それを選んだのは汚さないようにか？」

「兄上には敵いません」

「黒もよく似合う」

兄がそう言くと、妹は珍しく照れたように頬を染めてはにかんだ。

そうしていれば可愛らしいのという言葉は飲み込んで、兄——エドワードは、ベッドに腰掛けたまま手を伸ばして妹の長い黒髪を梳くように撫でた。その、濡れたように艶のある髪といい、色白ではあるが健康的な赤みの差す表情といい。美女の要件を兼ね備えているに関わらず、多少じゃじゃ馬の気があるこの妹は、その表情も男性のように凛々しかった。少女のしおらしさよりも、少年のような荒削りの逞しさがある。髪を梳く自分の手が病的な白さと細さなのとは正反対で、面差しは良く似ているのに全く似ていないと、そんなことを思っただけでエドワードは目を細めた。

そんなエドワードの様子を、エレオノーラが怪訝な表情で見上げる。

「兄上？」

「……いや。花をありがとう。活けるものを——」

立ち上がりかけて、だがエドワードの体はすぐにベッドに引き戻されることになった。体を折って激しく咳き込む兄に、慌ててエレオノーラが花を置く。

「兄上！？」

「……だい、じょうぶ……」

荒い息の合間に零れた言葉は、酷く説得力がないと自覚してエドワードは苦笑した。だが口元を拭ってそれを納め、妹へと向き直る。「済まない、エル。そろそろ稽古の時間だ。行かなければ」

「無理だわ、そんな体で。私、今日のご容赦下さるよう父上に頼んで——」

「大丈夫だ」

踵を返す妹の腕を掴み、さっきよりも強く、有無を言わせぬような声色でエドワードは今にも飛び出して行きそうな妹を止めた。

強い声と、強い瞳に、エレオノーラは仕方なく足を止める。

エドワードは小さく笑った後に剣を取って退室してしまい、エレオノーラは花を活けてから、主のいなくなった部屋を出た。

第二話 王家の定め

その日はずっと、エレオノーラは気が晴れなかった。

汚れが目立たないのは良いのだが、暗い色というのは気分まで暗くするようだ。エレオノーラはドレスのスカートに目を落とすと、小さく嘆息した。

「ねえさん、続きはまだ？」

そのスカートを引かれて、はっとする。弟のねだるような目を見て、エレオノーラは慌ててその髪をくしゃりと撫でた。

「ああ、ごめんなさいね、ライ」

本を読み聞かせている途中でぼんやりしてしまったようだ。不満げな弟に詫びると、エレオノーラは本を持ちなおした。だがそんな姉を見て、弟はふと眉間の皺を解く。

「疲れてるの？」

「うつん、そうじゃないわ」

もう一度髪を撫でてから本に目を落とし——だが、全く文字が目に入らずに、エレオノーラは本を閉じた。幼い弟は心配そうにこちらを見上げてきて、その不安を拭うように笑いかける。本を読むのは諦めて、エレオノーラは違う話題を探した。

「……ねえ、ライオネル。ちゃんと勉強はしている？」

「なんで急に勉強の話するのさ」

「ほら、その言葉使い。また父上に怒られるわよ」

二つ違いの弟は、未だにやんちゃで子どもっぽい。末妹のイザベラの方がしっかりしているくらいだ。だからエレオノーラにとってライオネルは凄く歳が離れているように感じてしまう。咎められてむくれる姿を見ていると、その思いはますます強くなる。そんなライオネルは可愛い弟なのだが、ハーシェン家の次男であることを考えると、いつまでも甘やかしてはいずれ辛い思いをするのは彼だ。

「あのね、ライ。私はあなたの元気で可愛いところ凄く好きだけど、だからこそ貴方が父上に叱られるのを見るのは辛いよ。ね？ 私のことは姉さんではなく、姉上と呼ぶのよ」

「……やだ。ねえさんはねえさんだもん……」

「我儘言わないの。……ほら、泣かない。男の子はすぐに泣いちゃダメよ」

ずび、と大きく鼻をすすり、両手で一生懸命に両目をこするライオネルを見て、エレオノーラはその涙を拭うのを手伝った。

「わかったわ。二人だけのときは姉さんでもいいから。その代わりに、ちゃんと姉さんの言うこと聞くのよ？」

「……うん」

「よし。ライは素直で可愛いわね」

「ホント!？」

そう言って微笑むと、ライオネルは嬉しそうにぱあっと笑った。

今まで泣いていたのはどこへやら、一転して元気になった弟を見て、エレオノーラが目細める。

「ええ。そんな風に、元気なライも大好きよ。……まあ男の子だもんね。勉強ばかりしているより、元気に走った方がいいわよね」

だが今度は、ライオネルの表情が沈んだ。百面相のようにころころ表情が変わるのは今に始まったことではないのだが、理由が気になつてライオネルの沈んだ顔を覗き込む。

「どうしたの？」

「……でもぼく、戦に行くのは嫌だ」

その言葉に、父がライオネルの剣術を稚拙だと嘆いていたのを思い出す。そして、ハーシェン家の男は腑抜けばかりだと嘆いていたことも。

「馬鹿ね。ライは戦争なんかなくていいのよ」

弟の小さな肩に手を回し、優しく抱きしめる。

ライオネルが剣を使うのを苦手とするのは、才能の問題もあるかもしれないが、根が優しいからだ。エレオノーラは知っている。傷

つけることを恐れれば剣は鈍る。兄が、よく苦い顔でそう独白していた。

そんな思いを、この小さな弟にまでさせたくない。

「でも、嫌だなんて誰にも言ってはダメよ」

だが、囁くのは警告でなければいけなかった。

ここヴァルグランドでは、隣国フレンシアとの戦争が百年以上も続いている。打倒フレンシアこそがヴァルグランドの悲願であり、ヴァルグランドを統べるハーシェン家の唯一無二の目的だ。その為に血を流すことを喜びとしても、厭ってはいけない。それがこの家に生まれた定めなのである。

しかしそれでも、エレオノーラは弟を戦わせたくはなかった。弟が戦を嫌っているなら、その方が嬉しかった。そして、同じくらいに——兄にも戦って欲しくなかった。

表ざたにはされていないが、エドワードの体は病魔に蝕まれていた。訓練や剣の稽古など病の身には過酷だろうし、寿命を縮めかねない。ずっと気が晴れないのもその所為だった。ひどい咳をしながらも、剣を持って立ちあがる姿が頭から離れず、胸が苦しい。

「……あ。そうだね」

だが唐突に、エレオノーラはそんな声を漏らしていた。

「嫌だ。どうして今まで気付かなかったのかしら」

ライオネルから手を離し、両手で両頬を押さえる。

とても素晴らしいことを考え付いたのだ。今まで思いつかなかったのが不思議で、それが悔やまれるくらい、素晴らしいことを。

「……ねえさん？」

「ライ、ごめんね。用事ができちゃった。続きはまた後で」

怪訝そうに呼びかける弟に構わず、エレオノーラは立ち上がると部屋の扉に手をかけた。だがその途端、扉は押してもないのに突然開いた。

「ねえさん！」

もろにバランスを崩したエレオノーラを見て、ライオネルが顔色

を変えて立ち上がる。だが、彼が危惧するような事態は起こらなかった。ぐらりと傾いた体が受け止められたとき、来訪者の存在とそれが誰であるのかを知る。

「ノックもしないで済まない。早く会いたくて——大丈夫か？」

「レインハルト。戻っていたのですか」

体を起そうとするが、やんわりと腕の中に引き戻される。それにさりげなく抵抗を示しながら、エレオノーラは幼馴染の青年を見上げた。

「ああ、ついさっきな」

「ローデルフィールはどうでしたか？」

「王都よりずっと華やかで活気がある。君にも見せたかったよ——そうだ、渡したいものがあるんだが」

ふとレインハルトの視線が外れ、エレオノーラがその先を追うと、毛を逆立てた猫のようにレインハルトを威嚇しているライオネルと目があつた。

「……明日、私がエンズレイに伺います。先ほど戻ってきたばかりなら、疲れているでしょう？ 今日には休んだ方がいいわ」

見つめる先で、レインハルトの整った顔が不満そうに歪む。だがすぐにふつと相好を崩すと、レインハルトは手を離れた。

「では、待っているよ」

扉が閉まる音に隠れて、エレオノーラは嘆息した。だが弟の視線が刺さって、そちらを振り向く。

「ぼく、あいつ嫌いだ」

「ライ……、そんなことを言ってはダメ。私はいずれエンズレイに嫁ぐの。レインハルトは私の義弟になるのよ」

「どうして？」

その疑問が、エンズレイに嫁ぐ理由か悪口を言っではいけない理由の方かを計りかねて、一瞬エレオノーラは口ごもった。だが、恐らく両方に対してだろう。

「レインハルトの兄上が、私の許嫁だから。エンズレイの嫡男と結

婚するのがハーシェン家長女のしきたりだからよ。それと、誰でも
ろつと人のことを悪く言つてはいけないわ」

「ねえさんはそれでいいの？ 要するに、好きだから結婚するんじゃないんだろ」

幼い弟の口から出た大人びた質問に、エレオノーラは今度こそ答えを失う。とはいえ、ライオネルはまだ十歳になったばかりだ。そう深い意味のある質問ではないとわかっているのに、戸惑ってしまう。

「……でも、嫌いじゃないわ。それより、急いであるから。あとでね」
早口で言い残すと、今度こそエレオノーラは部屋を後にした。

第三話 剣と髪飾り

寝苦しさにエドワードが目を覚ますと、太陽は既に一番高い位置を越えていた。

慌ててベッドを降りようとして起き上がるが、それだけの行為が訓練よりも苦行だった。全身に錘でもつけられているように酷く重い体は、自分のものではないようだ。そんな経験は初めてではないが、今日は一等酷かった。

はいずるようにしてベッドを抜けると、剣を手取る。その重さと言ったら、平常時に人一人を抱える以上に思えた。ひきずりながら部屋を出て、壁に手についてホールへと向かう。だが、不意に聞こえてきた音に、エドワードは歩みを止めた。

その音は、剣のぶつかり合う音。

（稽古が……始まっている？）

そんな馬鹿なことがある筈がない。軍の訓練ではなく、今から行われる筈のものは自分の為の個人的な稽古だ。階段を降りるのをやめ、エドワードは体をひきずって、吹き抜けから下の階を覗きこむ。

——体が凍った。

そこには自分がいた。

肩までの黒髪を翻して、軽々と体を動かし、戦う自分。まるで、いつもの稽古を客観的に観ている感覚に捉われる。だが、違う。もう自分はあるなかに生き活きと動くだけの体力がない。そして何より、自分は——エドワードは、ここにいるのだ。

「……エレオノーラ……ッ」

その名を囁みしめるように呼び、引きずっていた剣を砕かんばかりに握り締める。



運動した後の心地よい汗を拭い、エレオノーラは自室へと向かっていた。足がもつれそうなほど疲労していたが、その疲れもまた心地よいものだった。昨日くすねておいた兄の服も、ドレスよりずっと動き易くて気に入っていた。

「もっと早くこうすれば良かったんだわ」

疲れも忘れてスキップでもしたい気分だったが、それを思うと悔しくもあつた。もっと早くにこうしていれば、兄の病があそこまで悪化することもなかったらう。

よく兄の稽古を覗いていたので、剣の持ち方も振り方も知っていたし、思ったよりずっと巧く戦えた。褒められることさえあつた。それほど剣術がやりたいわけでもなかったが、褒められれば悪い気はしない。戦は嫌いだが、純粹に剣を振るだけならば楽しいと思つた。うまく隙をついて剣を繰り出す駆け引きは、エレオノーラにとってゲームやスポーツに近い感覚だ。それらとて、女性である自分には縁のないものであるから余計に楽しい。

部屋に戻ってベッドに飛び込み、そのまま眠ってしまいそうになつて――だが、大事なことを思い出して睡魔に抗い、起き上がる。

レインハルトと約束していたのを思い出した。

面倒だが、すっぱかせば押し掛けてくるのは目に見えている。しぶしぶ着替えようとして、服を脱ぎかけて、だがやめる。――また、良いことを考え付いたのだ。

元通りに服を直すと、エレオノーラはその格好のまま部屋を飛び出した。

今のところ、誰にも気付かれていないのだ。レインハルトだったこの格好を見れば、きっとエドワードだと思うに違いない。兄との見分けもつかないのかと言ってやったら、いつも余裕綽々なあの笑顔はどんな風になるだろうか。

楽しい悪戯を思いついた子供のような目を輝かせ、エレオノーラは城を出ると、すぐ傍に居を構えるエンズレイの屋敷へと向かった。エレオノーラのハーシェン家とエンズレイ家は旧くからの付き合い

だ。親の代からとか、そういうレベルの旧さではない。ヴァルグランドが興ったのと時を同じくして、エンズレイはその長きに渡ってずっとハーシエンに仕えてきた。ハーシエンとエンズレイは、いわばヴァルグランドの光と影なのである。

「これは、エドワード様」

エンズレイの使用人達は、こちらの姿を認めるや否や、各々の作業を中断して敬礼をする。彼らがこちらをエドワードと呼んだことに内心でほくそ笑みながら、エレオノーラは片手で礼を解くよう促した。

「私的な用事だ。レインハルトはいるか」

「は……、しかし……」

「通るぞ」

彼らが言い淀んだ理由は想像できる。恐らく、今日来るのは『エレオノーラ』の方だと聞かされているのだろ。だがそれを理由に『エドワード』の訪問を断ることなど使用人にはできない。彼らの間を悠々と行き過ぎ、エレオノーラはレインハルトの部屋を訪ねた。

「……………」

「久しいな、レインハルト。エレオノーラからの伝言だ。今日は所用で来られぬと」

出迎えたレインハルトに、しゃあしゃあと述べる。それを見て、

彼は形の整った眉を寄せた。

「……………なんのつもりだ」

「え」

まさか見破られるとは露も思っていなかったエレオノーラは、彼の言葉の意図を計り損ねた。

「まさかオレをたばかる為だけに、その髪切ったわけではないだろうな」

だがそこまで言われれば、エレオノーラも気付かないわけにはいかなかった——ただの一瞬たりとも、彼を欺くことはできなかったということに。

悔しさに唇を噛むこちらを尻目に、レインハルトが服の中から何かを取り出す。

「……あ」

綺麗に包まれたそれが、渡したいものであることは想像がついた。恐らくは、ローデルフィールからの土産だろう。だが、レインハルトがその包みをとぎ、現れたものを見てエレオノーラは思わず声を漏らした。

「何より、オレが君を見分けられぬと思われていたのが心外だ。この礼はいつか必ずするぞ……エレオノーラ」

氷のように薄く、鋭く、冷たい声と共に、レインハルトが手にしていた髪飾りを握り締め、砕く。

だが謝罪の言葉は、口に貼りついたまま、どうしても表には出なかった。

第四話 逝く者の願い

陰鬱な気分で、エレオノーラは帰途についていた。先ほどまでの浮かれた気分は、すっかり消え失せてしまった。何人かに、エドワード様、と呼びとめられたが耳に入らず、真つ直ぐ自室に向かって扉を開ける。

「何処に行っていた、エレオノーラ」

誰もいないと思っていた薄暗い部屋から声があり、エレオノーラはびくりと肩を震わせた。暗がりから現れたエドワードと、鏡合わせのように向き合う。ただし、表情は対照的だった。

「……兄上……？」

いつも穏やかなエドワードのそんな表情を、エレオノーラは見たことがなかった。双眸から吹きこぼれそうな感情は怒り以外に例えられず、だがその理由がわからない。レインハルトを怒らせたことは、たばかりうとした頭があるから仕方ないと思っていた。だが兄に怒られるような謂われはない筈だ。

元はと言えば、調子の悪いエドワードの代わりに剣の稽古を受けようと思ったことがきっかけなのだ。もちろん頼まれたわけではないし、感謝して欲しいわけではないが、怒られることでもないと思う。それなのに。

「自分が何をしてるのか、解っているのか……？」

ぞつとするような声色と共に、エドワードが手を伸ばす。産まれて初めて兄を怖いと思った。咄嗟に避けようとしたがそれは許されず、強い力で肩を押されて、エレオノーラは強かに床で背中を打った。とても病に冒されているとは思えぬ力だった。それに怯んでいる間に、もがく体を押さえられて無理やり服を剥ぎ取られる。

「兄上ッ、やめ——」

「すぐに着替えるんだ。異端裁判にかけられたいのか」

だが出かかった悲鳴は、兄の表情を見て消えた。エドワードの手

から力が抜けると同時に、エレオノーラも抵抗しようとした手を止める。

女が戦に出ることも、男装することも、宗教的観点から異端者とみなされる。その末路は、異端裁判にかけられ、大方が火刑に処される。裁判などとは名ばかりのものだ。異端は等しく許されない。

「エル……」

母が逝つてからは、もはや彼しか呼ぶ者のない愛称を優しい声で呼ばれ、もう拘束はされていなかったがエレオノーラは動けなかった。覆いかぶさるようにして、エドワードが一度は離れた手を頬へとあてがう。さっきのような力尽くではなく、愛しむように、優しく。

「私はもうすぐ逝く。だがお前には幸せでいて欲しいんだ」

静かな声に、エレオノーラは息を飲んだ。少しずつ、夜の闇が部屋を侵食していく。

頬から髪に手を滑らすと、エドワードは短くなってしまったそれを惜しむように撫でた。

「いいか、二度とこんなことはするな。お前は周囲を気に掛け過ぎだ。自分を顧みることも覚えた方がいい……」

もうその頃には、恐怖など消えていた。むしろ、一時でもそんな感情を持った自分を嫌悪すらした。

髪に触れる手に手を重ねる。その体温が、消えてしまつなど信じられないことだった。信じたくもなかった。

「兄上……」

掠れた声で呼ぶと、手から温もりは離れた。エドワードが立ち上がり、エレオノーラも体を起こす。だが、足に力が入らず、立ち上がることはできなかった。

「乱暴なことをして済まぬ。だがお前はこれくらいしないと聞かないだろう」

詫びながら差しだされた手に、手を伸ばしかけるが掴めない。

「……嫌だ。もう置いていかないで」

母を失ったときの虚脱感に襲われ、伸ばそうとした手を引きよせて、エレオノーラは膝を抱えた。そうして涙を堪える。

——誰かを失うのは、もうたくさんだ。なのに、兄は病魔に冒され、父は戦場へ行く。例えば何かの奇跡が起きて、兄の病が治ったとしても、結局は戦場へ行ってしまふのだ。馬鹿げていると思う。それを止められるならば、どんなことでもするのに。

せめて、今ある家族を守りたいと思うのに、それすらも許されない。

済まない、小さく紡がれた声を、エレオノーラは聞こえない振りをした。

■ □ ■

エレオノーラの長い一日は、まだ終わらなかった。

エドワードが出ていってから、いつの間にか眠ってしまったらしい。だが、ノックの音に目を覚ます。

服を着ないまま寝ていたので慌ててドレスを探すが、すぐに人と会つのは無理だ。体裁を整えることを諦め、エレオノーラは扉の外に短く問いかけた。外の暗さと大体の感覚から察するに、もう夜更けだ。身支度など整っていないのが普通だろう。

「誰ですか？」

「フィオラにございます」

侍女の一人の名を聞いて、エレオノーラは益々怪訝な顔をした。身内ならともかく——ことライオネルは、よく眠れないと夜更けに部屋を訪れてくる——、侍女がこんな時間に部屋を訪ねることなどそうはないことだ。

「何？」

「陛下がお呼びです。すぐにエレオノーラ様をお連れするようにと」
どきりと、心臓が大きく脈打った。さっと顔から血の気が引いて、体全体が冷えて行くのが自分でもよくわかる。

父に呼ばれることなど、稀にもないことだ。それでも、それが今日でないのなら、何の用事かと思っただろう。だが、今日という日がエレオノーラにとってはまずかった。

もしかして、今日一日、エドワードに成り代わっていたことが父に知られてしまったのかもしれない。

父がそれを知る機会がいつあったのかは不明だ。だが、厳格な父は娘だからと特別扱いするような人間ではない。容赦なく異端裁判に突きだすことくらいはするかもしれない。誰かに指摘されるよりは、自ら汚点を切る方がデメリットは少ないと父なら考えるだろう。

「エレオノーラ様？」

返事をしなかったためだろう。今一度名を呼ばれ、我に返る。

「今、行くわ。ごめんなさい、支度を手伝って貰える？」

兄の服をベッドの下におしやって、エレオノーラは震えを押し殺してそう返事をした。

第五話 王の画策

フィオラに手伝ってもらって身支度を整え、エレオノーラは一人で父の私室へと向かっていった。

肩で切ってしまった髪はどうにか結びあげてもらい、簡単にだが化粧も施してもらった。そうしてドレスを着れば、もうエドワードの面影はなくなってしまう。それを何度も確認してから、だが拭えぬ不安と共にエレオノーラは部屋を出た。

父とはいえ国王に会うのであるから、身なりを整えることはおかしくない。だが夜更けの急な呼びつけに、平素ならここまではなかった。しかしそれを勘繰られることよりも、短くなった髪からエドワードを連想される方が今のエレオノーラには怖かった。

支度到手間取ってしまったので小走りに父の私室へと向かい、騒ぐ胸を落ち着かせながら扉を叩く。

「父上、エレオノーラにございます」

動揺を悟られぬよう毅然とした声で名乗り上げると、入れ、と低い声が返ってきた。父の部屋に入るのは、初めてではない——という程度にしか訪れたことはないが、概ね、記憶と変わったようなところはない。城のどの部屋より広く、天井も高く、父王は飾ることに興味がないため、調度品も装飾もほとんどない。目につくのは剣や鎧などの武具ばかりで、王の私室というよりまるで練兵場のような印象を受ける。

「このような時間に、一体どのようなご用で——」

問いかけは遮られた。足元で重い音がして、そちらに気を取られたからだ。

「父上……？」

足元に投げて寄越されたものを見て、父の意図がわからずエレオノーラは戸惑いの声を上げた。

「抜け」

返ってきたのは答えではなく短い命令で、ますますエレオノーラは狼狽する。放られたのは、一振りの剣だった。訳もわからず立ち尽くしているうちに、ぴり、と空気が震えた。実際に震えたのではない。もっと感覚的なものに近い。確かにそこにあるというものではないが、確かに肌を撫でて行くそれは――

――きつと、殺気と呼ばれるものだ。気付いたときには父は既に剣を抜いていた。

「……ッ!？」

何かの冗談だと思った。――相手が父ではないのなら。

反射的に剣を拾っていた。冗談でないのなら、そのまま立っていれば斬られるだけだ。

やはり今日の一件が露見したのだろうか。それで異端裁判にかけらるまでもなく、この場で処分しようというのか。ぐるぐるとぐるを巻いていた思考は、だが剣に触れた瞬間に消えた。それから剣を抜いたのは、何かを考えてのことではない。

死にたくないとか。抗いたいとか。

そんなことも考えていなかった。ただ冷静に、こちらに向かう剣の切っ先に視点を当てる。

それが振り下ろされて、真っ向からそれを止めれば、力で押し負けるのは確実。ならば選択は二つ。受けて捌くか、避けるか。ただし避けるならぎりぎりまで引きつけてからでないと、追随されてしまう。だが、歴戦の父の剣をうまく捌くことなど至難の業だ。

(だとしたら、道はひとつ)

こちらに向かつてくる剣に対して、まっすぐに剣を構える。振り抜かせて、その隙を狙う。技術のない自分にはそれしかない。だがただ避けるだけなら、臆さず集中すればできぬことはない筈だ。

父が剣を振り上げる。無駄な動きなど一つもないからこそ、その軌道のはっきりと読める。実の娘に対し、一分の迷いも躊躇いもない。だがそれもまた予測していたことだ。

(まだだ――)

恐怖は棄てる。焦燥も棄てる。必要なのは、どこまでも細く研ぎ澄まされた神経と、集中力。

切っ先が視界から消える。自分の脳天に迫るそれが、いつ自分に触れるかは、あとは感覚で推し量るしかない。

「——ッ！」

ふと風を感じたその瞬間、右足を軸にして左足のみを引く。髪を結っていた紐が切っ先に触れて、ばさりと髪がおちる。そのうちの数本かが宙を舞う頃には、エレオノーラは手を返していた。剣を振り下ろすのに、こちらもまた躊躇いなどない。研ぎ澄ませた神経に、余分な感情の入る余地などなかった。だから、手が震えたのは剣を振り抜いてから。

「……あ……」

手ごたえはなかった。そして、目の前には既に父の姿すらなかった。

だが首筋に圧力を感じて、呆けたような声を出す。視線だけを滑らせると、父の剣の切っ先が首元に触れていた。体が強張るが、自由はすぐに返ってくる。

「……やはり、昼間のあれは、お前か」

「見て……おられたのですか」

父が剣をおさめるのを見て、エレオノーラは深く息を吐き出しながら思わず首筋に触れていた。切られたのではないかと思うほどの威圧だったが、手には血の一滴すらもつかなかった。

「私は、異端裁判行きですか」

「——それにはあまりに惜しい」

覚悟と共に問うた声に、返ってきたのは思わぬ言葉だった。

「エレオノーラ。剣を手にしたのは、今日が初めてだな？」

「はい……」

確認に近い問いかけに困惑したまま頷く。しばらく返事はなく、エレオノーラはうなだれていた頭を上げた。そこにあった父の顔にあるのは、いつもの取りつく島もない厳格さでも、冷たさでもなく、

哀しみ。いや、憐れみ。

そのような父の表情を、エレオノーラは未だかつて見たことが無かった——否、一度だけ。

母が死んだ、あの日見せた顔とよく似ていた。

どうして父がそのような顔をするのか理由がわからず、戸惑うばかりの娘の傍まで王は歩み寄る。

「——エドワードはもう長くないだろう」

「……………」

「しかしライオネルは未だに剣を取ろうとせん。ハーシエン家の男は腑抜けばかりだ」

「……………」

父の嘆きに、エレオノーラは唇を噛んだ。兄も弟も好きだから、そんな言葉は聞きたくない。だがそれに反抗できぬ程度には、エレオノーラは父のことを嫌えなかったし、ハーシエン家を憎めなかった。結果、何も言えないエレオノーラの双肩に父王が両手を置く。

「お前は今日より剣を取れ」

「……父上？」

「私が教える。そして、来るべき日には、お前がエドワードになるのだ」

「仰っている意味が、解りません」

肩が壊れそうなほど、父が両手に力をこめる。だがその痛みもどこか遠いものに思えていた。

そして吐き出した言葉は嘘だった。

エドワードの代わりに戦うことに依存はない。しかしそれはこの国——ひいてはグラン・ルゼリアの宗教観が覆らない限り不可能なことだ。それに、父が言うことはきつと、自分が認めたくないことの向こうにある。

「エドワードはもう長くない。エレオノーラ。エドワードが死ぬ日は、お前が死ぬ日と覚悟しておけ」

それを痛いほどはつきりと突きつけられ、エレオノーラは戦慄し

た。

だがそれに抗う術を、彼女は持たなかったのである。

そして数年後、その運命の日を訪れる。

第六話 生く者の葬儀

——すまない、エル。

それが、最後の言葉だった。

安定していた戦況は、フレンシアにリディアーヌという少女が現れたことで一転した。王都を目の前にして、快進撃を続けていたヴァルグランド軍が、弱冠十六歳の少女が率いた兵を相手に大敗を喫したのである。それを機に、状況は一気に逆転した。

奪った領土は次々に取り戻され、今度はヴァルグランドが侵略される側に回ると、国王エドワード七世は自らが出陣した。

そして、数年に及ぶ激しい攻防の末、ついにリディアーヌは捕えられた。そして、救世主としてフレンシアの民に希望を与えた聖少女は、ヴァルグランドの異端裁判にて火刑に処された。その事實はフレンシアに絶望をもたらし、同時にヴァルグランドへの憎しみも募らせた。

一方ヴァルグランドも、リディアーヌとの戦いにこそ勝利したものの、その代償は大きかった。いくつもの砦がリディアーヌによって落とされ、国王は重傷を負って王都へと撤退。なにより目の前であった勝利が消え去ったことに、ヴァルグランドの民は大いに疲弊していた。

その結果、ヴァルグランドの誰もがハーシェン家長子エドワードの出陣に期待を寄せた。

歳は若い、エドワードは軍人として優秀であった。戦の天才と言われた父の剣才とカリスマを余すことなく受け継いだ彼は、怪我によって一線を退いた父に代わり、出陣の準備を進めていた。彼ならこの状況を打開できるとヴァルグランドの民全てが信じた。

しかしそれを嘲笑うかのように、フレンシア王国ノイシス地方で

再びリディアーヌを名乗る少女が現れたのである。そしてまた彼女によって、拮抗していた戦況はフレンシアの優位に転がる。フレンシアでは、復活したリディアーヌを誰もが神聖視し、讃え、そして希望を見た。

そんな折の、ヴァルグランドの劣勢に追い打ちをかけるようなエドワードの病死だった。

このことが公に出れば、ただでさえ疲弊している兵や民は再起できなくなる。そう判断した国王の命により、エドワードの危篤は、ごく限られた腹心と身内にのみ告げられた。そして父と兄弟達が見守る中、静かにエドワードは息を引き取ったのである。

「葬儀は略式で執り行う。戦況は逼迫している、すぐに準備をしておけ」

その死を確認するや否や、国王は短い言葉を残して踵を返した。その言葉が誰に向けられていて、何を意味するなのか、エレオノーラには解っていた。しかし声が出なかった。

「——あなたと言う人は！」

ようやく絞り出した掠れた返事は、だがライオネルの激昂に掻き消される。

「息子が死んだというのに戦のことですか！ あなたにとっては、僕たちも駒と同じなんだ！」

悪意に満ちたライオネルの叫びに、父王は足を止めた。

「そうだ」

「……ッ」

一分の迷いもなく返ってきた冷たい返事に、ライオネルが拳を振りかぶる。だが、父を打ち据えるはずのその拳は、彼が振りむいたことによつていとも簡単に止まってしまった。

「部下とお前たちの命に差などない。戦場では私を庇って誰かが死のうとも、その屍を踏みつけても剣を振るうというのに、どうして肉親の死にだけ戦を忘れて涙など流せる？」

真つ直ぐにライオネルを射抜く眼光には、言葉どおり涙の一滴もなかった。ただ寒々しく、ただギラギラと滾るようなその目に、ライオネルが一步も動けずにいる間に父王は退室していく。

「……ライ。彼は私達の父ではなく、王なのよ。ハーシェン家に生まれた以上、そのくらいは弁えなさい」

凍りついたように動けない弟を、エレオノーラはやりわりと諭した。それに重なった声は、しかしライオネルのものではなく。

「エドワード兄上が亡くなった今、兄上がハーシェン家の長男なのです。そのような弱気では困りますわ」

目元の涙を拭いながら、イザベラがキツとライオネルを睨む。その台詞を聞いて、エレオノーラは意を決して口を開いた。

「……ライオネル、イザベラ。今から私が言うことをよく聞いて。とても大事なことなの」

イザベラの言は確かに正論でありながら、今の状況には相応しくなかった。

弟と妹の肩をそれぞれの手に抱き、エレオノーラは告げる。あの日、父から告げられたことを。

「病死したのは『エレオノーラ』。今から執り行われるのは、貴方達の『姉』の葬儀です」

弟達にとって、それは予想もしてない言葉だったのだろう。ぽかんとした四つの瞳に見つめられつつも、エレオノーラは彼らが理解するのを待った。――先に、イザベラがはつとしたように視線を落とす。

「そして私は、『エドワード』として出陣します。いいですね、もう姉と呼んではいけません」

「――どうして！」

ここにきてようやく、ライオネルが悲鳴のような声を上げる。

「何故姉さんが戦に行くんだ！ 兄上が亡くなった今、僕が――」

「では、兄上に戦ができるとでも？」

イザベラが上げた鋭い声に、ライオネルが言葉を詰まらせる。

ハーシェン家次男でありながら剣もろくにあつかえない身である以上、兵を率いる能力も人徳もないことは本人が一番わかっていた。それでも納得できず、ライオネルが唸る。

「しかし……」

「しかしではありません。魔女の一件で民が疲弊していることなど、兄上にもお解りでしょう。今の状況では、家臣も民も兄上の死を受け止めきれませんわ。……そういうことですわよね、姉上？」

「……ええ。イザベラ」

まだ幼いのに、イザベラの口調はしっかりしている。だが、瞳は弱い。ライオネルは性格のきついイザベラを苦手としている節があるが、姉の目で見ればイザベラが無理をしているのは一目瞭然だった。それでも甘やかさないのは、もうそれが許されない状況に置かれていることと、これからは傍で守ってやれないから。そして何より、イザベラがそれを許さないと思うから。

「姉上のご英断、妹として誇りに思います」

大人びた口調で贅辞を口にする、イザベラもまた部屋を出て行った。略式とはいえ、喪服へとドレスを着替えるのはそれなりに時間がかかる。そして、エレオノーラもまた、葬儀の傍ら兄が倒れたことで頓挫してしまった出陣の準備も進めねばならなかった。だが、ライオネルはまだ俯いたままだ。

「……ライ」

「ごめん、姉さん」

そして彼が紡いだ言葉も、エドワードと同じ謝罪だった。ぎゅつと胸を掴まれるような思いがして、エレオノーラは弟の頭を抱き寄せた。

「どうして？」

「僕が、臆病だから。だから姉さんに辛い思いをさせる」

「それは違うわ。あなたがいるからやれるの。謝らないで——私は、嬉しいのよ」

兄の身代わりを提示されたとき、逆らう術は持たぬものの、心は迷っていた。兄に代わって戦うことに依存はない。だがそれは、元をただせば兄に少しでも長く生きて欲しいという思いの為だ。死ぬことを前提とした身代わりはつらかった。

それでもエレオノーラから迷いが消えたのは、自分が戦えば、せめてライオネルを戦わせずに済むかもしれないということだ。

自分が戦うことで、また戦況が覆せれば。そして、この戦争を勝利に導けば、もう誰も戦わなくてもいい。

周囲の誰かを死地に見送ることしかできなかった今までより、それはエレオノーラにとってずっと楽なことだった。

「嬉、しい……？」

「忘れないでライ。今日これより、この場所に私は女であることもエレオノーラの名も棄てて行く。だけど、貴方を案じている肉親がいることに代わりはないわ。私がエレオノーラであろうと、エドワードであろうと」

「……………」

「ライの優しいところ、私も兄上も大好きだったわ。だから貴方はそのままいて」

抱きしめる手に力を込めて、エレオノーラは最後の姉としての言葉告げた。

そしてその日、ヴァルグランド王女エレオノーラの葬儀が、しめやかに執り行われた。

第七話 堕ちた英雄

領土を失い、国王が負傷し、そして王子を病で失いながらも、ヴァルグランドを絶望が襲うことは無かった。

エドワードに扮したエレオノーラが初陣を勝利で飾り、勢いづいたヴァルグランド軍は、そのまま一気にフレンシアへと攻め上る。そして第二のリディアーヌが戦場で果てた頃には、ヴァルグランドに黒太子ありと囁かれるようになっていた。

「お帰り、姉さん」

一年ぶりに本国へと戻ると、再会するなり弟はそんな言葉を口にした。既に父王への挨拶は済ませて自室におり、夕刻も過ぎていたために他に人の姿はなかったが、それでもエレオノーラは眉を潜めた。

「ライ……姉と呼ぶなど、言ってあったはずだ」

「でも姉さんは、二人のときはそう呼んでいいと言った」

「屁理屈を言うな、それはまた違う話だろう。全く、お前はいつまで経っても子供だ」

だが、髪を撫でようと手を伸ばしてみれば、あることに気付いてエレオノーラはその手を止めた。

「……随分と、背が伸びたな」

「いつまでも子供じゃないさ」

姉の手を取っておろさせ、苦笑するライオネルを見てエレオノーラもまた苦笑した。だがそれもすぐに消す。

「変わりはないか？」

「特には。イザベラも元氣だし、父上の容体も落ち着いている。……ただ」

ふと、ライオネルは言い淀むように言葉を切った。目だけでそれを促すと、視線も外される。

「ただ、なんだ」

仕方なく直接問うと、再びこちらを見たライオネルは、だがやはり言い難そうに口を開いた。

「このところ、よくレインハルトが来る」

「なんだ、そんなことか……、お前、まだレインハルトが嫌いなのか？」

婚約の件はもう白紙だろうにと言いかけて、しかしエレオノーラは神妙な表情に戻った。

「……そうだな。こうなつては、イザベラがエンズレイに嫁がねばなるまい」

「いや、そういうことじゃない。それに、イザベラは嫁に行きたがつてるようだし姉さんが気に病むことはないと思うが」

「行きたがっている？」

「『戦好きの父上や弱つちい兄上より、エンズレイの殿方は魅力的』と言っていた」

エレオノーラは一瞬きよとしたが、すぐに可笑しそうに声を上げて笑った。

「はは、遅しいな、イザベラは」

ライオネルは面白くなさそうな顔をしていたが、エレオノーラはひとしきり笑っていた。それから、無造作に防具を外して椅子に腰を下ろす。

「なら、別にレインハルトが来ていても構わないじゃないか。元々、父上はレインハルトを気に入っていたようだし」

「それは——そうだが」

ライオネルは尚も何か言いたそうにしていたが、それ以上何も言えないままにノックの音が会話を中断させる。しかしエレオノーラの短い返事の後現れた人物に、ライオネルは顔をひきつらせた。

「戻ったそうだな、エドワード」

甘いテノールを聞きながら、エレオノーラは葬儀の日を思い出していた。

王家の葬儀とは思えぬほどの、小さく静かな式。その中で、ただ淡々とエドワードとして振るまっている間中、視線を感じていた。その主が誰か、想像がつくからエレオノーラは決してそちらを見なかった。

——欺ける自信のない者が、身内以外に一人いた。

「……久しいな、レインハルト」

顔を上げないまま、あくまでエドワードとして答えると、レインハルトはぴくりと片眉を跳ねあげた。だがそれよりも気になるのは、嫌悪感を丸出しにする弟の方だ。ライオネルは馬鹿ではないが、我を忘れれば何を言い出すかわからない節はある。

「ライ、お前はもう下がれ」

その自覚はライオネルにとてあるのだろう。有無を言わさぬ声で言つと、不満そうにしながらもライオネルは黙って退室した。それを待ちわびていたかのように、レインハルトが口を開く。

「それで、まさかこの期に及んでオレを欺けるとは思ってはいまいな？ エレオノーラ」

やはり——と。あの葬儀の日から危惧していたことが現実となり、エレオノーラは口を引き結んだ。だが表面上は平静を装う。

「何を言っている？」

しかしその平静も長くは持たなかった。腕を掴まれ、椅子から無理やり引き上げられる。振り払おうとするが、力ではとても対抗できなかった。びくともしないその腕から、それでも何とか逃れようとしながらレインハルトを睨みつける。

「髪が伸びたな、エレオノーラ。やはり長い方がよく似合う」

「だから、違うと——」

声は最後まで続かなかった。力尽くで腕を引かれたかと思えば肩を強く押され、バランスを崩した体がベッドの上に落ちる。

「……ッ！」

「これが男の身体なものか」

「やめろ、離せ——！」

「そんな大声を出して人が来たらどうする。この姿を見られてもいいのか？」

口角を引きあげて笑うレインハルトに対し、一切の自由を奪われたエレオノーラにできた抵抗は、ただ目を逸らさず睨みつけることだけだった。

「——こんなことをして、ただで済むと思うな」

「案ずるな。陛下には許可を頂いている」

返ってきた言葉に、エレオノーラは今度こそ余裕を失った。そして耳を疑う。

「なんだと……？」

「オレは十数年、兄上からお前を奪うことだけを考えて生きてきた。その絶好のチャンスをおレが逃すとも思つか」

唇が触れそうなほどに顔を近づけられ、エレオノーラは反射的に顔を背けた。だが無理やりに塞がれる。強引で一方的な口付けのあと、己の唇を舐めながら、レインハルトは愉しげに笑った。

「名が売れすぎたな、黒太子。ルゼリアに目を付けられる前に、陛下はお前をおレに委ねてくれるそうだ」

「……ッ」

「つまり、お前はオレのものになったんだよ、エレオノーラ」

「エレオノーラは、死んだ！」

唯一自由になる声を振り絞り、エレオノーラは叫んだ。それはレインハルトに向けたものでもあり、己へと言い聞かせるものでもあった。その名は棄てたものであり、その名で呼ばれることは、決してあつてはならぬことだ。

しかしレインハルトの表情は揺らがなかった。

「そんなことは、オレが認めん。オレはずっと信じなかった。お前が死んだなんてことを、どうして認められる……？」

だが言葉と共に、ぎらぎらと滾るようだったレインハルトの瞳は熱を失った。その途端、エレオノーラは全身から力が抜けて行くのを客観的に感じていた。

押さえつけられていた力がそこから離れても、動けない。

腕から外れた手が、頬を撫でる。それこそ、認めたくない愛おしさを伴って。

「お前はエレオノーラだ。お前が棄て、忘れたというならオレが思い出させてやる」

何かを言おうと開きかけた唇は再び塞がれ、頬から滑り落ちた手が身体をなぞる。だけどそれが、やけに遠く感じた。

全てが冗談のようだった。

父の命令も、兄の死も、戦の喧騒も、そして今この瞬間さえも。全てどうでもいいことだ。どの道、父が決めたのなら逆らうことはできない。その術を、エレオノーラは知らない。

だけどそのまま自分はどこに流されていくのだろう。生きながら葬られ、だが棄てることも許してくれない。なら結局自分は誰なのだろう。

答の出ぬまま、身を委ねる他の道が、エレオノーラには見つけれなかった。

第八話 運命を壊す者

それからすぐに、またリディアーヌを名乗る者が兵を上げ、再びエレオノーラは前線へと戻ることとなった。しかし、エレオノーラは内心そのことにほっとしていた。

決して戦は好きではない。純粹に剣術なら嫌いではないのだが、敵兵とは言え人を斬ることには慣れなかった。ただ、共に戦う部下を死なせることがそれ以上に耐えられなかったただけだ。全ては国と家のためと、そう割り切って戦ってきた。しかし、その道の行きつく先など考えたことはなかった。だから、父がその先に女性としての幸せを用意しようとしてくれたことは素直に嬉しい。なのに父に会うのもレインハルトに会うのも苦痛で、城には居なくなかった。確かに心のどこかには、恋に焦がれて愛に夢見るような、捨てきれない女性としての感情がある。不器用ながらも、レインハルトが自分を想ってくれるのも解っているし嬉しくもある。だから決して悪い話ではないと思うのに、逢瀬の度に感じるのは、こんなものかという虚しさだった。

その感情の理由はわからないが、結局のところ、血に塗れた手と傷だらけの身体では、もう女としては生きられないのだと思った。ならばいつそのこと、黒太子として戦場で果てられればいい。

密かにそんな思いを抱きつつ、新たなリディアーヌの討伐へと向かったが、死に場所を探しているうちにその戦も一段落ついていた。第三のリディアーヌを打ち破り、あとはその残党を一掃すれば終わる。そこまで漕ぎつけて、まだ生き残っている自分にエレオノーラは絶望を覚えていた。

何をしていても虚無感がつきまとい、軍議にも訓練にも身が入らなくなっていた。戦況が落ち着いてくると、次第にそれらのことは弟がするようになり、エレオノーラは部屋に籠ることが多くなっていた。

——今回の出陣にはライオネルも同行していた。止めたが勝手についてきたのである。だが強く止めなかったのは、自分自身が傍にいて欲しいと思っていたからだ。何かしら心の支えがなければ立てないまでに追いこまれていた。

それなのに、世間は英雄黒太子などと持て囃すのだから、笑ってしまう。

誰もいない部屋で、エレオノーラは一人、自嘲じみた笑みを零していた。だが扉の開く音がして、その笑みを苦笑に変える。

「ノックしろと言っているのに」

「ああ……ごめん、姉さん」

「姉さんもやめると……、本当にお前は成長しないな。成長したのは背丈だけだ」

「それは済まなかったな」

苛々に任せてつい嫌味を零すと、皮肉めいた謝罪が返ってきた。

それを聞き、自分の八つ当たり気付いてエレオノーラは立ち上がって頂垂れた。

「いや、私の方こそ済まぬ。私がすべきことを、お前に押し付けてしまつて」

「いいんだ。何かしていないと、僕がここにいる意味がない」

「……ヴァスカーには戻らないのか」

苦笑したライオネルに、ふとエレオノーラはそんなことを問いかけた。

ここに来る少し前に、ライオネルは父王からヴァスカー地方の領主を命じられていた。領主を務めるにはライオネルは年若かったが、ヴァスカーは片田舎だ。ハーシエンの名があればどうにかなると、その一言で追いだされたと言ってライオネルは笑っていたが。つまりは、相変わず剣を取らない次男を見限ったということだろう。しかし勘当ではなく、田舎とはいえ領土を与え、ハーシエンを名乗ることを許しているあたりが父らしいと思った。

「僕がいない方が、部下がうまくやるさ。それより姉さんの役に立

「ちたい」

「こんな血なまぐさいところ、お前には似合わないよ」

「姉さんにも似合わない」

強い言葉で返され、エレオノーラは薄く微笑んだ。本当ならこんな危ない場所に弟を置きたくはないが、無理に帰せるほど今の自分に余裕もなかった。弟に弱いところなどは見せられないが、それでもその存在があるのとないのとは全く違う。

「ありがとう、ライ」

「……………」

謝辞を言うと、照れたように目を背ける弟を見てくすつと笑う。風貌からは残念なほど可愛げが消え去ったが、そういう顔は幼いころと変わらない。

「さて……、そろそろノイシスを片付けておかないとな」

だがそんな微笑みは封じて、黒太子としての表情へと戻る。ここは最前線だ、甘えが許されてはいけないだろう。だが、ライオネルの方は照れた表情は消えたものの、どこか子供じみた表情はそのままだった。

「まだ本国から指示は来ていない。戦況はこちらに優位のまま落ちてきているし、ノイシスに残るフレンシア軍とてその数はいいない筈だ。急くこともないだろう」

言っていることは間違っているではないのだが、正論を口にする割に表情は弱い。そんな違和感に、エレオノーラは声を上げかけて、そしてやめた。

「——なら、お前に任せる」

そして言おうとしたことと別のことを口にして、立ちあがる。

「どこへ？」

「見回りもかねて、外の風に当たってくるよ。すぐ戻る」

「——姉さん」

前を行きすぎた姉を、ライオネルは咄嗟に呼びとめていた。だが足を止めて振り返る姉を見て、小さく首を振る。

「……いや。気を付けて」

ああ、と短く答えて部屋を出て行く後ろ姿は、やけに小さくてふらりと消えてしまいそうだった。呼びとめたのはそれを危惧してのことだったが、もし姉がもうここに帰ってこないならば、その方がいい。

逃げたいといえば、どれほど無謀でも連れて逃げた。だけど、そのような弱みを彼女は決して見せることはないだろう。

そのことに少しの寂しさを感じながら、ライオネルは窓の外を見上げた。

見事な満月だった。

その夜、その月の下で、運命に翻弄された英雄はそれを壊す者と出会う。

第八話 運命を壊す者（後書き）

過去編はこれにて完結です。ご読了ありがとうございました。なお、日常シリーズや他の番外編などをまだUPする予定ですので、完結扱いには致しません。

むらさめの誓い

雨に煙る帝都は混乱に支配されていた。立ち竦む者、座り込んで呆然とする者、行動は様々だが誰の顔にも生気がない。

そんな中を行き過ぎる男女がいた。

恐怖と絶望に噎ぶ帝都の住人とは違い、彼らの目には光があった。ただし、表情といえば、周囲とそう変わりはない。

ふとそれを自覚した少女は、ただ足を前に出すことで心を振り切ろうとしていることにも気付いた。そして恐らく、隣を歩く人物もそうなのだろう。彼は自分よりずっと早いペースで歩いて行くので、ときどき小走りにならないと追いつけない。それは、今余裕がないのか、元々そんな配慮をするような人物でないのかはわからない。或いは、両方なのだろう。だがそのことを指摘しなかったのは、少女にそんな余裕がないからではなく、ただがむしやらにでも前に進んでいたい自分の気持ちが合致していたからだと思う。

少女は小さく息を吐くと、すっかり強張ってしまっていた表情を緩めた。

「……あの」

小さく声を上げる。だが返事はなかった。聞こえていないのか無視されたのか定かではないが、もう少し声を大きくして、返事を待たずに少女は先を続ける。

「泣いてもいいですよ？」

「——は？」

今度はちゃんと聞こえたのか、それとも無視しきれなかったのか。不可解そうな声をあげて、男は歩みを止めてこちらを見下ろしてくる。端正な顔をしているが、その表情はいつも険しい。だけど、今はそれ以上に、少し悲しい。

「悲しいんでしょう？ だってあんなに姉さん姉さんって言ったのに。もう会えないんですよ」

少女も立ち止まる。

心を決ると分かっていて、あえて「もう会えない」という言葉を選んだのは、自分を諭す為でもあった。

だからそれは自分に向けた言葉だった。言葉にしないと甘えてしまいそうだったから。そして、泣きたいのも自分の方であった。だが、男は小馬鹿にするように口元を歪め、それから視線を外してまた早いペースで歩き出す。

「悲しくなどない」

表情は見えないが、きつぱりとそんな言葉を投げてよこしてくる。

「無理して——」

「無理などしてない。……この世で一番大事な人が、唯一友と認め
た男の傍で幸せになるんだ。これ以上に喜ばしいことがあるか？」
「……」

その言葉は筋が通っているし、納得できる。彼の大事な人は自分
にとって敵だから全面的に彼と同じだとは言えないが、彼の友は自
分にとってもかけがえない人だから、幸せであるならそれが一番望
ましいと思える。

これで良いのだとは、思う。

自分の大事な人とも、これで永久の別れになった。だけど、死ん
で後も戦うばかりの過酷な運命からようやく解放され、これで眠れ
るのだと満ち足りた顔をしていたことを思い出せば、そこにあるの
は悲しみだけではないと思う。

だけど、それは納得できても、やはり別れは辛い。

だからやつぱり、無理をしていると思う。

少女はもう一度声をかけようと顔を上げ、だが男の方が先に声を
上げていた。

「小娘」

「——は、はい。なんですか」

いつの間にかまた彼は立ち止っていて、少女も慌てて歩みを止め
る。その呼称について不満を言うのも忘れて応えようと、彼は少しだ

け眉間の皺を緩めた。

「僕たちもここで別れよう」

「え……」

思わず動揺してしまう。

共に歩む道でないことは解りきっている。そして、彼もまた自分にとつては敵にしかならない相手だ。その上、怒鳴るし愛想もないし、こちらのことは小娘呼ばわりだ。好意的な面などひとつもない。それでも、今一人になるのはどうしようもなく心細かった。

「……お前はフレンシア王に会うのだろう。僕もヴァルグランドに戻らねばならない。フレンシアに入れば僕は身動きが取れなくなるから、別ルートでこのまま直接ヴァルグランドへ向かう」

なるほどそれは道理だ。

ヴァルグランドに帰る彼が、来た道を使ってフレンシア経由で帰ることにデメリットしかない。フレンシア王都で別れば、彼一人でフレンシアを出ることは困難だろう。ヴァルグランド人であることがバレてしまえば——それも、彼はヴァルグランドの王子だ。囚われてすめばいいが、悪くすればその場で命がないだろう。

「お前は……一人で大丈夫か」

思わぬ言葉が降ってきたので、少女は考えを中断すると男を見上げた。だが彼はこちらを向いてはおらず、その目はどこか違う方を向いている。

「だ、大丈夫です。来るときだって一人で来たんですから」

慌てて自分も目を逸らし、そのまま彼を追いこして歩き出す。

立ち止まっている暇はないのだ。今は一刻も早く、この状況をフレンシア王に伝えなければならぬ。そして、無為な争いを止めるのだ。それができるのは、現状自分だけだ。慕い、従っていた絶対たる存在が消えた今、自分がすることはそれを嘆くことでなく、それに継ぐことでもなく、遺志を継ぐこと。そう強く自分に言い聞かせる。

「さよなら」

だが歩き出す背に、雨水が弾ける音がする。駆け寄ってくる足音に振りかえる前に、手を掴まれる。

「おい」

酷く無愛想な声に、ただどこかほっとしている自分がいた。その理由はわからぬままに、掴まれた手に強く何かを押しつけられる。

「……これ……」

それが何かを確認して、少女は軽く目を見開いた。凝った金の装飾に青の宝石が嵌まった指輪は、見覚えのあるものだった。

「どうして？ これ、お母さんの形見なんじゃ……」

「聞け、小娘」

戸惑いながら問いかけた言葉は、鋭い声に阻まれる。さつきほんの少し和らいだ表情は、いつも以上に陰しくこちらを睨んでくる。

「姉上がいなくても、僕は必ず僕の力で、ヴァルグランドとフレンシアに平和をもたらしてみせる。そして堂々とハーシェン家の名と共に国境を越えて、それを返してもらいに行く。だから、待っている……」

そう怒鳴りつけられて、少女は目を見張った。

その刹那、たくさんの記憶が脳裏にフラッシュバックした。

目の前で焼かれた故郷。奪われた家族。そんな混乱の中助け出してくれたひと。あの日から、ずっと敵国を憎み、抗い続けることで自分を保っていた。

だがそれらはずっと消えて行き、目の前には、一瞬にして驚くほど見違えてしまった青年だけが残る。

彼は敵国の王族で、ずっと憎み続けてきた筈なのに。今はどこを探してもそんな感情が見つからない。そのことに戸惑いながらも、少女はぎゅっと指輪を握り締めた。

「……その前に、私が返しに行つてあげるわ！ シスコン貧弱男になんて負けないんだから！」

「僕はシスコンじゃない！」

わざと減らず口を叩きつけると、彼は眉を吊り上げてそんなこと

を叫ぶ。これでは先ほどの決め台詞も台無しだ。それがなんだか可笑しくて、少女は零れそうになる笑みを押しとどめた。

「じゃあ、私のこと小娘って呼ぶのもやめてください」

そう言い捨てて、少女は男に背を向ける。そしてそのまま彼女は歩き出した。もう、彼は追い掛けてはこない。呼びとめはしない。気配は少しずつ遠くなっていく。

「なら次に会ったときには、せいぜいいい女になっている」

少し遠くに聞こえた声に首だけで振り向くと、その後ろ姿は思ったよりずっと向こうにあった。なのに、何故か大きく見えた。

「……何よ。少しかっこいいじゃないの」

握り締めた指輪を掲げて、それから少女はまた歩き出した。

そして自分に言い聞かせる。これらの別れは全て、終わりじゃない。始めて、始まりなんだと。

神の王国はもうない。聖少女も英雄もない。だけど、憎しみが剣にも魔法にも勝るなら、その逆の感情だって何より強くなれる筈だと。

そう信じて、少女はやがて走りだした。その顔には涙があったが、同時に晴れやかな笑顔があった。

とこしえの別れ

書面の文字に目を通し終わると、老兵は顔をあげて、ふうと重い息をついた。そしてペンを取り、新しい紙を取り出しかけて、そしてやめる。逡巡の後にペンを置き、そしてもう一度嘆息した。

これで、何度目のやりとりになるだろう。だが、書面の内容は私たちごっこで埒が明かない。これ以上は、「彼」がなんらかの成果を持って帰らない限りどうしようもなかった。

だが時間はそう残されてはいない。

ヴァルグランド第二王子の言を信じるならば、敵も指揮官を欠いている。迂闊に攻めてはこないだろうが、だからといってずっと手をこまねいているだけとは思えない。ルゼリアの支援がない今、攻められれば持ちこたえられないだろう。

「さて、どうしたものかの」

詮無い独り言を零したそのとき、じつと音を立てて蠟燭の炎が揺れた。ふと感じた気配に振り返る。そこには何の姿もなかったが、老兵は口を開いた。

「……これは、お久しぶりです」

傍から見れば独白にしか見えない問いかけに、だが答は間を置かずして返ってくる。

「姿も見せず失礼。それくらいの力が残しておくつもりでしたが、あまりに煩く呼びとめられたもので」

何もない空間から、微かに少女の声が返ってくる。苦笑交じりのそれに、老兵もまた目元の皺を深くした。

「それは残念ですな。しかし、そうまでしてこの老いぼれに会いにきて頂けるとは、思いもありませんでしたぞ」

体ごと声の方を向き、老兵が声に答える。相変わらずそこには何も見えないのに、老兵には白い髪に赤い瞳の少女が見えるような気がしていた。その、頑なな表情までもが。

「……聞きたいことがありました」

そして、それが崩れるのが。

「貴公はわたしのことをさぞ恨んでいたでしょう。貴公が開きかけていた和平の道を閉ざしたのはわたしです。なのに貴公はわたしの下で戦う道を選んだ。いつ寝首を掻かれるかと思っていたのに……そんな素振りも見せなかった」

「これは心外ですな。私は誠心誠意あなた様にお仕えしてきたつもりでしたが」

「そんなことは知っています。だから聞きたいのですよ」

焦れたような声は、暗に時間がないことを示していた。それに気付いていたからこそ、老兵はふっと表情を固くすると、片手で顔を覆った。

「……そうですね。そう……最初は、或いは恨んでおったかも知れませぬ。ですが、あなた様の傍で戦ううち、あなた様のひたむきさに惹かれていたのもまた事実です。王が無血の道を選んだところで、うまく事が運んだという保証はない。この世の中に、正しい答など存在しない。そんな残酷な世界で、あなた様はご自分の信念を貫いた」

「買い被り、ですね。ですが、貴公がそう思ってくれているのなら、悔いなく逝けます」

「——咲良様は、どうされましたかの」

ともすれば消えそうになる気配を、繋ぎとめるかのように今度は老兵が問いかける。

「魂の本来在るべき場所へと戻りました。……全てが在るべき姿に戻ろうとしています。無為な争いは終わる。血はまた流れるでしょうが、今度こそそれは新たな時代を告げるでしょう。ですが——」

そこで声は言い淀んだ。だが、その時間もないことは、声の主が誰よりも知っている。すぐに言葉は継がれた。

「あなたもまた、この世界に在るべき魂ではないのでしょうか」

「やはり、気付いておられましたか」

「でも、あなたは戻れないですね。わたしの力でどうにかできれば良いと思ったのですが……」

「お気持ちだけ頂いておきます。私はもう、この世界に長くともまじりすぎた。おそらく、こちらとの結びつきの方が強くなっているでしょう。それに、あちらに私の帰る場所は最初からないのですよ。老い先短い命は、あなた様の遺志を継ぐことに使わせて頂きたいです」

答える声はなかった。

隙間風が行き過ぎ、消えそうな気配を攫って行ってしまうようで、老兵は目を伏せた。神経を研ぎ澄ませることで、消えてゆく少女の、それでも今確かにここにある魂を、最後の瞬間まで感じていようとした。だが、消えそうな声は、それでもまだどうにか声として聞こえてくる。

「多くは……聞きません。また、その時間ありません。ですが……あなたはそれで良いのですか。自分の世界でもない場所で、本当のあなたは何を抛り所とするのですか……」

「抛り所など幾つもあります。王をお守りし、この国の剣となり盾となれたことも。あなた様と共に戦ったことも。咲良様と出会えたことも全て、この老いばれの中で息づいておりますぞ。……しかし、そうですな。あなた様にひとつだけ、頼みがあります」

返事はないが、老兵は答えを知っている。目を開き細めると、彼は立ち上がって足を踏み出した。

「真咲。世界の狭間に置き忘れた名を、どうか、持っていて下され」

手を伸ばすと空気が震えた。

その一瞬に、老兵は伸ばした手の先に微笑む少女の姿を確かに見た。

「わかりました、マサキ。貴方がわたしの影となりこの軍を支えてくれたこと、わたしは忘れません。わたしがこの生涯でぶつかり合えた唯一の人よ。どうか……あなたの心が安らかでありますように」

それきり声は途絶えた。そして、立ちつくす老兵がいくら待てども、その声が再び耳に届くことはなかった。

「……ゆっくりおやすみ、リディアーヌ」

目の奥に焼きつけた笑顔に、老人は慈しみを込めて呟く。

それが、聖少女と崇められ、死して後も剣を振るい続けた、少女の儚い最期だった。

しあわせの日常 前編

聖少女として異世界に呼ばれた、などというとても体験をしてから半年が過ぎようとしていた。

思い出すにつけ、夢ではないかと今も思う。そしてそう思う度に不安になるのだ。あれが夢ではないと唯一証明する存在が——エドワードが、ちゃんとこの世界にいることを確認したくなる。

あれから、彼女は俺の家で生活している。他に当てなんてあるわけないから必然だったとはいえ、家族にどう切り出したものかと、相当思案したものだ。結局、うまい話なんて思いつく訳がないので、ありのままを話すことになった。

けどそれはもう、一か八かの賭けだった。いや、賭けにすらならない。こんな突拍子もない話、普通は誰だって信じやしない。

とすると、俺の家族はよほど普通じゃないらしい。

母さん曰く、「嘘をつけないように育てたのは私であるから、信じるのは私の義務」だそうだが、それ以前に頭がおかしくなったことを疑わないのか。

まあ実際にエドワードがいる以上、彼女を放りだすこともできないっていうのはあっただろうけれど。異世界云々はともかく、俺が人攫いをするような人間じゃないってことくらいは、家族は信じてくれてると思うてる。

おまけに、エドワードはこちらの言葉を全く理解できなかった。俺が向こうで言葉に困らなかつたのは、リディアの魂を持っていたからだ——と、リディアヌが言っていた。つまり、こちらの世界となんの関わりもないエドワードにはこちらの言葉はわからないってことだろう。

ただ――、不思議なことに、俺だけは彼女が何を言っているのか解った。向こうにいるときは少し感じが違って、全くの日本語に聞こえるわけではないけれど、それでも不思議に何を言っているのか解るのだ。よくわからないけど、俺の魂がリディーアヌであることに変わりはないということなんだろう。

だとすれば、俺は向こうの言葉を話すこともできる筈だ。なのに、どうしてもそれはできなくなった。多分これは、俺が日本語と向こうの言葉を使い分けている意識がないからだと思う。

こっちで家族と話しているから、日本語に意識が向いてしまうんだろう。何も考えなければ喋れるのかもしれないけど、意識して無意識になんてなれない。何度試してみても、エドワードには通じていないみたいだった。

そうして、何語だか分らない言葉を吐くエドワードと、それを真剣に通訳する俺を見れば、家族もとりあえずエドワードを保護するしかなかったんだと思う。

イケメンが来たと喜んでいた姉ちゃんが、女だと知って落胆したという騒ぎが落ち着く頃には、すっかりエドワードは俺の家に馴染んでいた。

全く知らない世界で言葉も通じず不安だろうに、エドワードが不安な顔を見せることはなかった。そしてこの半年で、彼女はすっかり日本語がうまくなっていた。母さんが元幼稚園教諭で、うちに知育玩具が多かったり、母さんの教え方が上手いのも幸いしただろうけど、それにしたって上達が早かった。頭良いんだなって感心したら、「君とちゃんと会話がしたい」と真顔で言われて狼狽えた。……まあそれはともかく。

言葉が通じるようになって、戸籍のこととか、学校のこととか、問題はまだ山ほどある。当面生活はしていけても、病気になったときとか怪我したときとか、不測の事態を考えればこのままでいい訳

はない。一応、母さんとそういうことについても話はしているけど、もう少しエドワードがこっちの生活に慣れて、こっちの国の仕組みとか制度について理解して本人と話し合ってからでもいいだろうということでも落ちついていて。聡明な彼女のことだから、そう遠い先のことではないと思うけれど。

母さんがそう言うのも道理で、明らかに彼女は無理をしていた。そこに不自然さはないけど、何が変わかといえれば弱音を全く吐かないことが逆に変だった。母さんですら薄々それを感じているのだから、俺には余計いつもの強がりじゃないかって思える。でもそんなエドワードに、俺はかけるべき言葉が見つからなかった。

というより、俺「が」怖かった。

彼女が言葉を覚えたら、「本当は帰りたいんじゃないか」って聞いてしまいたい。もしそれに頷かれたら、俺はどうしていいのかわからない。エドワードの強がりのような笑顔を見るたび胸が痛んだ。

俺は、戦いさえなければ、彼女は幸せになれるって思ってた。それがいかに馬鹿で浅はかか、この半年で俺は嫌というほど思い知っていたから。

あれから向こうの世界がどうなったかは俺達に知る由もない。だけど、あれで全部円満解決って思えるほど俺も馬鹿じゃない。今度ハルゼリアとの間で戦争が起こっているかもしれないし、フレンシアとヴァルグランドだって、長年争ってきた相手を急に受け入れられる筈もないだろう。

そんな微妙な均衡の中で、きっとライオネルは戦っている。それを思えば俺だって辛かった。最愛の姉を奪った拳銃、俺が無茶やってひっかきまわした尻拭いを、全部彼に押し付けてきてしまったのだから。

肉親であるエドワードは俺以上に苦しんでいる筈だ。

わかっていて何も言えず、だけど時間だけは穏やかに流れた。

彼女に何ができるかと考えれば、ただ傍にることしかできなくて。

学校はさすがにやめられなかったけど、俺はあれから部活をやめて、できるだけ早く家に帰った。そしてできるだけエドワードと一緒にいた。俺が向こうの世界に行ったときには、彼女が傍にいてくれることで心細さから救われていたから。同じことを返すくらいしか俺には思いつかなくて。

だから今日も、授業の終了と同時に、俺は早々に帰途につく。部活に未練はなかったし、友達と放課後ふらふら道草食うこともなくなった。最短コースで家に辿りついた俺は、家の中でも最短コースでエドワードの部屋に向かう。そんな俺を、家族は過保護すぎるとよく笑う。エドワードの気持ちがちょっと分かった気がした。

エドワードの部屋は、元は物置にしてた六畳程度の狭い部屋だ。

けど必要な家具は姉ちゃんのチョイスで親が買ってくれて、その後さらに姉ちゃんの絶妙なレイアウトによりドラマにでも出てきそうなくらい可愛い部屋になっている。姉ちゃんは元々そういうのが好きだけど、ザ・女の子の部屋とでも言おうか……、ピンク基調でフリルカーテンなこんな部屋で、エドワードはいいのだろうかとか常々思っている。が、不満と言われたところで俺は姉ちゃんには逆らえないので、敢えて聞いてはいないけれど。

そんなエドワードの部屋のドアを開けると、ベッドと一体型になっているピンクのスチールの机の上で、珍しく彼女は居眠りしていた。傷を気にしてか夏でも頑なに肌を出さず、まだ半袖でも差し支えない陽気にそぐわないタートルネックのカットソーに覆われた肩が規則正しく上下している。

起こすのも悪いと思い、そっと回れ右しかけた瞬間に、群青色の

瞳が開いた。

しあわせの日常 後編

目を覚ましたエドワードが、机から顔を上げてこちらを見上げる。

「あ……咲良。お帰り」

そう言って彼女が薄く微笑み、俺は出て行くのをやめて内側からドアを閉めた。

「ただいま。えっと、起こしてごめん」

「いや、いい風が入るからつい転寝してしまった」

彼女の言う通り、開け放した窓から入る風がレースカーテンを巻き上げていた。

季節は秋に入り、残暑もようやく落ち着き始めている。ヴァルグランドは寒かったから、きつとエドワードは暑さに強くないと思う。これからは少しは過ごしやすくなると思うって言ったら、やっぱりちよつとほつとして見えた。

あんまり無理するなよって、言いかけてやめる。そんなこと言ったら返って無理しそうだった。

「……何してたの？」

代わりに他愛もない話を振る。気が利かない俺は他に話題も思いつけない。でもエドワードは微笑んだまま、机の上のノートを見せてくれた。

「漢字を覚えていたんだ。咲良の名前は、これか？」

そんなことを言いながら、エドワードが「桜」の字を差す。

「あ、いや。それじゃないんだ。俺の字は、当て字で……」

と言いつつ、エドワードが当て字の意味を知っているとも思えないので、シャーペン握るエドワードの手に俺は自分の手を添えた。そして、自分の名前を書く。

そうしながら、ふと彼女が真っ先に俺の字を覚えようとしてくれたことに気付いて顔が熱くなった。そんな瞬間にエドワードと目が合ってしまったもので、途端に恥ずかしくなった俺は、乱暴に字を

書きあげて急いで手を離した。明らかに不自然だったけど、エドワードはそれより字の方に興味津津のようで、さっそく漢字辞典を引いている。

「へえ……、綺麗な名前だと思っていたが、意味も綺麗なのだな」

「男の名前じゃないけどね。でもエドワードにそう言っただけで、なんか嬉しいよ」

素直にそう言っただけで、エドワードがこちらを見て微笑んだ。その笑顔を見ながら、俺は前から気にしていたことをもう一度口にする。

「名前といえば、本当にいいの？ ……エレオノーラじゃなくて」

俺がついついエドワードと呼んでいたせいで、彼女はすっかりエドワードで定着してしまってた。後から訂正しようとしたのだけど、エドワード自身に止められて、結局そのままだ。

「いいんだ。なんというか……恥ずかしいんだ、そうやって呼ばれるの」

でも、レインハルトはそう呼んでたけれど。この期に及んで嫉妬している俺の心を見透かしてかどうかは知らないけれど。彼女はふと手を伸ばすと、俺の胸に触れた。

「その名は、君だけが覚えていてくれ」

そう言っただけで笑った、その笑顔は、いつかも見た泣いているような笑顔で。

胸が苦しくなる。

俺はいつになったら、苦しみや悲しさから彼女を守れるような男になれるんだろう。戦いのないこの国では、物理的な強さなんて酷く無意味に思えた。だったらどうやって強くなればいいんだろう。この世界に戻ってきて、ますます答えは遠くに行ってしまった気がする。

だから、その手を引き寄せることしか俺にはできない。でもそれだって、彼女の為じゃなく、本当は自分の為なんじゃないだろうか。

「……咲良？」

「本当は、帰りたい？」

突然抱き締めた俺の真意を探るように、エドワードが俺の名を呼ぶ。そんな彼女に、俺はついに今まで怖くて聞けなかったことを聞いた。聞かないまま道を探るのはもう限界だった。それでも答えが怖くて震えそうになる俺の腕から、彼女は顔を上げてまっすぐに俺の目を見た。

「言った筈だ。君がいる世界がいいと」

儂さの消えた強い瞳で、区切るようにはっきりと、エドワードがそう口にする。

「勘違いしないでくれ、咲良。あのとき、私は君の手を振り払うことだってできた。だけど何度やり直したって私がそうすることはないだろう。例えライに恨まれても、この世界がどんなに私を拒んだとしても」

じんと、目の奥が熱い。

——違う、これじゃ助けられてるのは俺の方じゃないか。

悔しくて死にそうだ。

俺が守ると誓ったのに。もう戦いなんてないのに、命の危険もないのに。それなのに俺はまだ、彼女に守られるのか。

「……ライオネルがあんたを恨むようなことなんて万一にもないだろうけどさ。こんなんじゃ、俺が恨まれるな」

エドワードが口にした名に、俺はあの険しい顔を思い出した。それでそんなことを呟くと、エドワードが不思議そうな声を上げる。

「何故？」

「何故って、元々俺は恨まれてたよ。あいつ姉さんに手を出すなってしょっちゅう襲ってくるし、弱音を吐こうものなら容赦なく殴ってくるし。会談のときなんて左右二発だよ？ あんときは口の中切りまくって……」

「会談？」

……しまった。

惨めな気分を振り切ろうと、調子に乗って喋りすぎた。けどその失言を悟った頃には、鋭い彼女はもう察してしまっている。

「すまない。それはきつと私の所為だな」

珍しく彼女が頬を染めて俯いて、俺はその数百倍狼狽して裏返った声を上げた。

「ち、違ふよ！ あいつが勝手に誤解して……！」

顔が熱い。火が出そうというのはこのことだ。本当に発火するんじゃないかと思いつつ、俺は悲鳴のように叫ぶ。

「誤解？」

「だ、だってあれ、さよならってことだったんだろ？ もう会わないつもりだって言ってたじゃないか」

俯きながら、もごもご呻く俺の頭上に――くす、という笑い声が降ってくる。なんだかそれが酷く懐かしく思えて顔を上げたのだが、エドワードは笑っていなかった。そして、真顔で俺の顔を覗きこむ。「違ふよ。それもあつたが、あれは……死ぬ前に、惚れた男との接吻というのはどんなものか知りたかつたんだ」

「――あ、え？」

「でも、なんだか頭が真っ白になってしまつて、思い出せないんだ。だから……もう一度教えてくれないか？」

「え……う、え、あ、ええ！？」

すつと伸びた彼女の手が頬に触れた瞬間、まるでそこから強い電流でも流れているように、俺は飛び跳ねて後ずさり、そのままずっと尻餅をつく。だが、そんな俺を見たエドワードが腹を抱えて震えているのを見て、体中の血が顔と頭に集結した。

「か、か、からかつたな！？」

「ぶっ……いや、すまない。君は相変わらず可愛いな」

笑いすぎて苦しそうに、エドワードがそんなことを言ってくる。そんな言葉も、最近は聞かなかつた。だから俺にとっては不名誉な言葉なのに、嫌じゃない。嫌じゃないけど、やるせない。笑つてくれたのはいいけど、俺ってこんな笑わせ方しかできないんだろうか。「そんなに腐るな。別にからかつていない。君がいちいち可愛い反応をするだけだ」

「か、可愛いって……俺は……ッ」

なんだかだんだんイライラしてきた。いや、彼女に苛立つてるわけじゃない。

可愛いなんて言われたら、やっぱ男として見られてないんじゃないかってすごい不安になってしまっじゃないか。一緒にいたいって言うてくれても、当たり前のように傍にいてくれても、そんなこと言われたら気持ちが見えなくなってしまう。

男として見てもらえず振られた過去が、俺には相当トラウマだった。でも、あのときはそれも仕方ないって思えたけど。

でも、今はそれじゃ嫌だ。

ちゃんと男として見て欲しいし、頼って欲しい。

だけど今の自分では無理だろうってことも解りすぎていて。そんな自分への苛立ちが俺をたきつけて、咄嗟に両手で彼女の両腕を掴んでいた。

「からかってないってことは、さっきの嘘じゃないってことだろ」
驚いたようにこちらを見る彼女を真っ直ぐに見つめ返す。変なところに火がついてしまったらしい。ちよっと後悔したけど、もう今更引けない。

「なら、するよ」

エドワードは目を逸らさなかった。驚いたように見えたのも一瞬のこと、すぐに彼女も真顔に戻る。

「いいよ」

焦るわけでもうろたえる訳でもなく、静かに見つめ返してくる群青の瞳が点いた火を一瞬で消火する。途端にはったりも利かなくなってしまうって、うろたえたのは結局俺の方だった。

「ちよ……、ちよっと待つて」

「ああ。待つよ」

「お、俺、本気だからね？」

「……ああ」

笑いを堪えているのがバレバレな返事は、俺をさらに落胆させる。

そして楽しそうな彼女の声が、さらにそれに追い打ちをかける。

「私がしょうか？」

「い、いや！ だめ！」

悲鳴を上げる俺に、ついにエドワードは吹き出した。

なんだかヴァルグランドにいた頃を思い出す。こんな風にエドワードにからかわれて、ライオネルに睨まれて、すぐそこが戦場だなんて忘れそうになるくらいの穏やかな日々。ライオネルはエドワードが俺を構う度気に入らなそうな顔をしていたけれど、エドワードが笑うと、それでもどこか嬉しそうだった。

「……エドワード」

「ん？」

「ライオネルは、あんたが笑っていれば幸せだと思う。俺も同じだから……、俺」

「わかってるよ。けど君はわかっていない」

けどそんな俺の言葉をエドワードが遮る。何のことも分らず怯む俺に、エドワードが焦れたように言葉を継ぐ。

「私だって、君には笑っていて欲しい。私の為に無理しているのは君の方じゃないか」

「あ……」

豆鉄砲を食らった鳩みたいにぽかんとする俺を見て、エドワードがふつとため息をつく。

「…… やつと気付いた。」

俺はこの世界に彼女を連れてきてしまったことに、勝手に罪悪感を覚えて、勝手に焦ってたんだ。それが、きつと何より彼女を苦しめていたのにも気付けないで。そんな俺を頼れるわけもなかった彼女に、頼られたくて無理してた。

なんて滑稽なんだろう。

気付いた途端、肩の力が抜けた気がした。そしたらなんか急に笑えてきて、ふつと笑い声が零れた。

そんな俺を見て、エドワードも笑った。

あの悲しそうな笑顔じゃなくて。無理して強がった気丈な笑顔でもなくて。

その心底幸せそうな笑顔に触れたくて、腕を掴んでいた手を離す。

「……エレオノーラ」

「……はい」

頬に触れながら、自然に口をついた名前に、エドワードはそんな返事を返すと微笑んだまま目を閉じた。

俺はきつと、この笑顔を守って行こう。ヘタレでも情けなくても、はったりでいいから笑っていよう。エドワードが笑えるように。あいつが安心できるように。

新しい誓いと共に、俺はそつと彼女に顔を近づけた。

だがその先は、夕飯を告げる母さんの声にお約束のように阻まれた。

しあわせの日常 後編（後書き）

番外編のお話は以上で終了です。お付き合い下さってありがとうございます。
ございました。宜しければ一言頂けますと嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151t/>

IN BLOOM 番外編集

2011年9月20日14時26分発行